

光ミュージアム 研究紀要 人文科学

HIKARU MUSEUM

第9号 2022.3

光ミュージアム 研究紀要 人文科学 第9号

令和4年3月31日発行
編集・発行 光ミュージアム
〒506-0051 岐阜県高山市中山町175
TEL 0577-34-6511
FAX 0577-34-6065
<https://h-am.jp>

光ミュージアム | 光記念館
 HIKARU MUSEUM

HIKARU MUSEUM



www.h-am.jp

飛驒の太型蛤刃石斧

吉朝則富

日本考古学協会 会員
日本旧石器学会 会員
飛驒考古学会 編集局

目次

1,はじめに	3
2,研究史	3
3,分類	4
4,個々の解説	5
5,考察	19
6,おわりに	25

1,はじめに

本稿は、弥生時代における大陸系磨製石器群の1つである太型蛤刃石斧（ふとがたはまぐりばせきふ）についての論考である。

飛驒地方の弥生時代石器に関しては、筆者が1989年～91年にかけて飛驒考古学会機関紙『どっこいし』31号～37号に発表した「飛驒の弥生時代石器」が最初である。このうち、太型蛤刃石斧については32号・37号に発表を行い、計17点を集成した。1991年10月には飛驒郷土史研究大会において「飛驒の弥生時代研究の現状と展望」を発表、1992年には『飛驒春秋』376号に「飛驒の弥生時代石器」を報告した。

太型蛤刃石斧の追加資料に関しては、『どっこいし』46・77・89・91・94・112・116号に新たに追加を行い、計67点を集成した。現在さらに遺漏資料・新発見資料を加え、計79点が集成されるに至った。ただし写真みの資料もあり、この場合縄文期の乳棒状石斧の誤認の可能性もあり、確認作業を進めている。

今回の集成に当たっては、馬場伸一郎氏・石川日出志氏・岡本孝之氏・杉山浩平氏らからの種々の問合せや示唆をいただき、参考とさせて戴いた。

2,研究史

飛驒における最も古い弥生時代に関する文献は、1932年笠原烏丸の「飛驒国初発見の弥生式土器に就て」(文献1)であるが、実際は古式土師器に属するものと判断された。(『県史』文献22)ただし石器として扁平片刃石斧が1点みられる。

1934年以降、ひじ山遺跡の弥生土器が知られるようになったが、石器として明確な弥生期のものは報告されていない。

太型蛤刃石斧が初めて報告されるのは、赤木清(江馬修のペンネーム)による「大八賀村山口の森下遺蹟(1)」(文献69 1938年)であり、垣水家の資料を紹介している。これによると、閃緑岩ではないが弥生期のものであり、八幡一郎分類の第3型石斧に属すること、頭端から刃部まで殆んど同じ幅で断面は楕円形を呈し、極めて鈍重な感を与える、刃は蛤刃をなして鋭利であるとしている。そして飛驒では大八賀村岩井(現丹生川町岩井)や白川村荻町などでも実見していると記している。岩井資料については不明であるが、白川村のものはNo.52の明善寺資料と思われる。

昭和10年の『飛驒石器時代遺蹟地名表』及び37年の『岐阜県遺蹟目録』における弥生時代石器の出土遺

跡については、筆者が『どっこいし』34号で述べた様に（文献39）認定の問題があって縄文期の石鋸形石冠を石庖丁と誤認して登録した例が多くあり、信頼できない。また太型蛤刃石斧の報告は1点もないが、筆者が集成を手がけた段階で実は明治43年に現下呂市萩原町から出土している事が判明した。これは高山市の角竹文庫に残る略測図で知られるもので、萩原町奥田洞はじかみ口において開墾の際、地下1尺余りの所より同じ大きさの挟入柱状片刃石斧と並んで出土したとあり、発見者は小林氏、売却して所在は不明との事であった。長さ23cmで、後述するように儀器用に作られたものが埋納された可能性が高い（第2図・文献36）。

その後、筆者による集成で79点の太型蛤刃石斧が認識されるに至っている。うち6点は発掘調査における出土資料、16点が文献からの遺漏あるいは新発見資料である。

今回、太型蛤刃石斧の論考を行うにあたり個々の解説及び分類・傾向・重量・石質・分布等について詳細に検討を加え、次段階への基礎資料として提供したいと考える。また扁平片刃石斧・挟入柱状片刃石斧・磨製石鏃・石庖丁・磨製石剣等の大陸系磨製石器群についても、何らかのアプローチを行ってみたいと思う。

3.分類

太型蛤刃石斧の分類にあたっては、町田文献（文献71）及び馬場文献（文献72）を参考にA～Cの3種に分類し（第1図）、さらに長さ階梯をa～dに4分類してそれぞれ長幅比・厚幅比をグラフ化した（第5・6図）。即ち、

A類：石斧のほぼ中央に最大幅を有するもので、平面形態は矩形

B類：刃部最大幅を有するもので、平面形態が基部の尖る二等辺三角形に近い

C類：刃部に最大幅を有し、平面形態が台形

である。断面形については、A・C類は隅丸長方形、B類は円形に近いものが多いが、基部・中央部・刃部とでは形状が異なるため、ここでは特に分類はしていない。

長さについては町田案の、a:長さ20cm以上、b:16cm以上20cm未満、c:12cm以上16cm未満、d:12cm未満の4分類に従う。推定長を算定し、統計に用いた。

石質に関しては従来、閃緑岩あるいはハンレイ岩と呼称される事が多かったのであるが、実際には変質輝緑岩・変質粗粒玄武岩・変質玄武岩・閃緑岩の4種類があり、肉眼では鑑定困難とされるため、総称としての「緑色岩類」という名称を使用する方が良いとする町田案（文献71）を採用したい。ただしすでに記載のあるものやそれ以外の砂岩等の石材表記については、文献の記述に従っておく。

遺存度については、完形から破片まで6段階程度に区分を行っている。

重量は判明するもののみ記入し、破損品については（ ）付きで示した。まだ充分なされていない部分である。

所有については、市町村誌に記入のあるものについてはそのまま記しているが、現在変更されているものも多いと思われる。個人所蔵物の多さも示している。

文献目録は極力、遺漏のない様に努めたが、特に飛驒に関するものに重点を置いている。

ただ集成表には重要文献のみ記した。文中における敬語は一部省略させていただいた。

4.個々の解説

1.高山市山口町の垣水家所蔵のもので、赤木による報告がある（文献69）。長さ24cmは飛驒出土物中最大であり、重量も1,500gを量る。頭部の打撃痕以外、完全に研磨され刃も鋭い。砂岩製で明灰色を呈する。森下遺跡は縄文から古墳期にかけての大遺跡であるが、赤木によれば古式の弥生式の羽状沈線に粘土ひものつく土器片がみられるとある。

2.赤保木町の赤保木遺跡近くの山崎新太郎氏による、昭和20年頃の発見である。身部に少し敲打痕が残るが頭部も研磨され、重量がある。刃部は潰れて鈍くなっている。暗灰色の砂岩製。赤保木遺跡からは、平成3年と16年の発掘調査において内垣内式・貝田町式・栗林式・高蔵式等の弥生式土器が出土しているが、石器類はみられない。個人蔵の多くが昭和20年以降の開田作業時における発見であり、6本もの太型蛤刃石斧の存在は注目される。

3.同じく山崎氏蔵。調整はやや粗く表面に凹凸があり、刃部も少し欠ける。緑色岩系の石材である。

4.同じく山崎氏蔵。刃部近くの破片で推定長は14cm程度であろう。3と同様の石材である。

5.赤保木町の中田吉右工門氏のコレクション中にあり、赤保木遺跡出土とされる。側縁以外ほぼ完全研磨され、刃部は鋭く重量もある。面取り整形・頭部研磨から、榎田型と見てよからう（馬場文献72）。

6.前原町畑直しにおける荒屋直美氏の採集品。昭和37～42年頃の土地改良時に多数の遺物が出土し、縄文中期土器・石剣の他、磨製無孔石庖丁もある。資料は胴部破片で推定長は20cm余りと思われる。緑色岩系。

7.著名な内垣内遺跡における、岩花秀明氏の採集品で、刃部小破片である。内垣内式横羽状文甕や朝日式石鏃も発見されている。

8.上切町野内発見の成田千稻コレクション（高山市蔵）の1点。下半部資料で推定長18cm、側縁に面取り整形があり、あまり厚みを持たない。

9.上切町ウバヶ平遺跡発掘資料。ほぼ完形であるが小型の部類で低ぎ減りがみられる。報告書には榎田型の搬入品かと記され、暗緑色を呈する。他に扁平片刃石斧や内垣内式横羽状文甕・栗林式壺も出土している（文献73）。

10.中切町四十九院橋近くの水田より発見された。頭部のみわずかに敲打痕を残す外は完全研磨され、重量もある。刃部は極めて鋭利で、暗灰色を呈する緑色岩系の石材である。山之下万五郎氏蔵。他に環状石斧・石剣なども所蔵される。

11.中切町日焼の山本徳重氏宅庭の土中より、昭和35年頃発見されたもので、刃部破片であるが断面は楕円形をなす。他に御物石器も出土している。

12.松本町の松本橋東方300m、谷地形の海拔581mの畑地より、昭和20年代の開墾の際に出土したとされる。発見者は地主の丸山氏、現所有者は安土孝氏である。資料は長さ18cm、断面は円形に近く重量は1,100gを量る。暗緑色の表面は完全研磨され光沢を放っている。頭部に敲打痕、身部中央に径1cmほどの凹みがある（文献54）。

13.著名な江名子町ひじ山遺跡からの出土品で、成田千稻コレクション中にある（高山市蔵）。刃部破片で、刃は鈍いが面取り整形がなされている。推定長は約20cm。

14.国府町の郷土資料館に収蔵される荒城神社遺跡出土品で、変質輝緑岩あるいはハンレイ岩とされる。刃部は鋭くほぼ完全に研磨されている。上半と下半では色調が異なり、着柄の状態を示すのかも知れない。遺跡は古くから縄文時代遺跡として知られており、境内からの出土遺物として土偶・石棒・石冠・三頭石斧等多数がある。昭和32年には県史跡に指定され、平成5年には神社北側道路部分の発掘調査がなされた。縄文後期住居址・ピット群さらには祭祀用の玉類などが発見されているが、弥生期の遺物はない。

15.上広瀬石原遺跡出土。頭部が先細りするタイプで乳棒状石斧に似る。全体に敲打痕を残し、刃は潰れて鈍

- い。田川氏コレクションには、御物石器・バナナ形石器・土師器等がみられる。
- 16.平成2年、上広瀬西ノ野の発掘調査で出土。蛇紋岩製で下半部は完全に研磨され、刃部は極めて鋭い。水神平式土器片も出土している。
- 17.高山市の高桑藤一郎氏所蔵のもので、国府町三川出土とある。下半部資料であり厚みはない。黒褐色を呈しよく磨かれ面取り整形もある。高桑コレクションには上切出土の扁平片刃石斧もみられる（文献85）。
- 18.三川アフラ出土で松垣氏蔵。宅地造成中の発見で下半部資料である。断面は円形に近く、刃部は鋭い。推定長21cm。
- 19.荒城神社東方の殿村出土。頭部5分の2を欠失する。推定長13cm、刃部は斜めとなっている。
- 20.平成6年、漆垣内立石遺跡発掘調査で出土。裏面の一部が剥落するが全容は伺える。長さ13cmの小型品で全体に研磨され、敲打痕は側面にわずかに残る。刃部は鋭い。暗褐色を呈する。立石遺跡では、配石遺構とともに氷式浮線網状文・遠賀川系土器・独鈷石・石冠・土偶など、縄文から弥生の移行期の遺物が出土、さらに溝中よりプラント・オパールも検出されている（文献86）。
- 21.瓜巢瀧ノ上出土、脇田氏蔵。砂田・瀧ノ上地点を総称して中洞遺跡と呼んでいる。刃部は斜行する。緑色岩系。
- 22.木曽垣内の阿多由太神社蔵品で、当地出土とされる。側縁は平行し頭部には敲打痕が残る。刃は鈍く、重量がある。
- 23.山本倉田出土、谷口氏蔵。刃部が広がるタイプで頭部は丸く、全体によく磨かれる。研ぎ減りの結果とも考えられる。暗緑色を呈する緑色岩系石材である。倉田周辺では内垣内式土器及び信州系栗林式類似の波状文土器などが少量みられる。
- 24.同じく山本和田出土で、和田氏蔵。敲打痕が多く残り加工はやや粗い。刃部のみ特に研磨が進んでいる。暗灰色を呈する緑色岩系の石材である。
- 25.26.飛驒市古川町の山樵館に展示される資料で、図や写真はないが実見。それぞれ岡前・上気多出土とされる。後者は気多若宮神社付近出土と思われる。
- 27.著名な沢遺跡近くの出土である。昭和30年代、沢上方の畑より渡辺氏により発見され、小林氏が所有する。明灰色の砂岩製で全体よく研磨され、頭部と刃部に潰れがみられる。面取りはない。断面は円形に近い。重量730g。
- 28.古川町の村坂氏コレクション中にある下気多出土品。他に3点を所蔵される。完形で、断面形はやや角張る。緑色岩系。
- 29.上町のバイパス工事に伴う2001年の発掘調査出土品で、文献74に図がある。頭部を含め全体に研磨が行き渡っており、刃は直線で鈍い。緑色岩系。
- 30.28と同コレクション中にあり、中野出土とされる。砂岩製で太く断面円形、重量がある。
- 31.高山市の照蓮寺に保管される田近房太郎コレクションの1つで、中野出土とある。昭和3年初夏、開墾中に大岩の下より出土したとされ、発見者は小林久六である。長さ22.6cmの大型品で上半部が尖り、敲打痕が残る。下半部は完全に研磨される。暗灰褐色の緑色岩系石材である。
- 32.村坂コレクションの谷中山出土とされるものであるが、谷は信包の誤りと思われる。ほぼ完形で頭部を一部欠損する。中山は著名な八幡山前方後円墳や丸山古墳のある遺跡地帯である。
- 33.上町発掘調査出土品で、文献74に図があり表裏両面の中央および基部先端に敲打痕が認められる。使い込まれて短くなった後に、敲石として転用されたと考えられると記される。
- 34.飛驒市神岡町殿の神岡城展示室に陳列されるもの。頭部が尖り刃部が広がるタイプで、小型、緑色岩系石材である。弥生後期土器もみられる。

- 35.高山市清見町岩平において昭和48年、貝田町系（内垣内式）土器とともにイノシシ除けのV字状溝中より出土したと『清見村誌』にあり（文献87）、発見者は道脇敏彦氏である。暗緑色の閃緑岩で重さ412g、研ぎ減りもみられる。
- 36.高山市一之宮町の亀ヶ平遺跡出土。村史（文献21）にカンラン岩と記され、長さ10.7cmの小型品である。刃部が斜行し使用痕が残る。頭部に敲打痕もある。
- 37.38.ともに亀ヶ平遺跡出土とされ、よく似た形状をなす。頭部には敲打痕が残り、刃部はよく研磨される。ともに明灰褐色の砂岩製。亀ヶ平遺跡は古くから知られる大遺跡で、縄文早期から弥生時代まで続くが、弥生土器として中期貝田町式、信州栗林式、石器として磨製石鏃も発見されている（文献53）。
- 39.丹生川町町方千蔵寺の旧町方小学校敷地が遺跡であり、明治41年の建設時に多くの遺物が出土した。弥生期では太型蛤刃石斧と環状石斧及び中期末の櫛描文土器片がある。本資料は高山市の瀬ノ上尹雄氏の父定五郎氏が校長時代（昭和初期）に同地にて収集したもので重量800g、よく磨かれて光沢があり刃部は鋭い。面取り整形もなされる。
- 40.法力馬場（森ヶ城馬場）において地元森和夫氏が小学生時代（昭和10年頃）、開畑時にクズ石集積地より発見したもの。少し敲打痕が残るがよく研磨され、刃部は鋭くやや斜行する。榎田タイプと思われる。
- 41.同じく法力馬場発見で森氏蔵。21.6cmの大型完形品で頭部が少し細まる。刃部も斜行する。遺跡は主に縄文前期の遺物が出土しているが、弥生期の土器は見られない。
- 42.カザノ（風野）は法力馬場に隣接し、地元の本山明雄氏によって採集されたもの。40と同タイプで太く重量感があり、頭部に敲打痕、刃部は鈍い。緑色岩系。
- 43.細越広殿出土。広殿（ヒロンド）遺跡は広大な河岸段丘上にある飛驒有数の大遺跡で、小字名により北方・下坪・桐山・細越に区分されるが、混同している場合が多い。本資料は高山市二木家に預けてあった江馬修コレクションの1つで、頭部約5分の2破片である。断面は卵形で推定長約20cmである。
- 44.広殿出土の胴部破片で飛驒考古学会初代会長寺地茂雄のコレクションの1つである。下坪広殿の可能性が高い。緑色岩系。
- 45.北方広殿出土。平野久夫氏が中学生時代に拾得したもので、頭部を少し欠失するが現長16.5cm、推定19cmである。上半部は少しくびれを見せ刃部は鋭い。全体によく研磨されている。面取り整形もなされる。村史には水神平式及び中期貝田町式土器片も出土しているとある。丹生川中学校蔵。
- 46.桐山広殿出土で、村坂コレクション中にある。やや扁平、頭部に敲打痕が残る。緑色岩系。
- 47.大萱宮ノ前付近出土とされる大萱八幡神社所蔵のもので、頭部が細まる乳棒状タイプ。一部欠失するが刃部はよく磨かれて鋭い。神社には他に、大型の定角っぽい石斧（約20cm）や扁平片刃石斧・勾玉なども所蔵される。
- 48.下呂市金山町福来出土。福来は下原にあり野首遺跡が知られる。本資料は小坂町福応寺の大江コレクションに含まれ文献はない。下半2分の1個体で砂岩製。敲打痕を残し刃は潰れている。推定長18cm。
- 49.研究史で触れた様に、明治43年萩原町奥田洞はじかみ口において、柱状挟入片刃石斧とともに埋納されていたもので、略図のみ残る。頭部に向けてやや細まり、胴部断面は楕円形をなす。長さは片刃石斧と全く同じ23釐（センチ）と記され注意を引く。何らかの規格があったのだろうか。
- 50.下呂市乗政下島遺跡出土品で、他に2点ある。本資料はそのうち最大のもので20cm以上ある（未実測）。写真によれば刃部を少し欠失するがほぼ完形に近く、全体に敲打が残り刃は鈍い。玄武岩質の石材である。島田良作氏蔵。下島遺跡ではこれまで御物石器・石剣・石冠、さらに五貫森式・檜王式・水神平Ⅲ式・内垣内式横羽状文甕等が出土している、著名な遺跡である。
- 51.馬瀬中切寺垣内出土とされ、二村幸男氏所蔵。平成20年10月12日の石器鑑定会にて実見した。完形であるが頭部に敲打痕、刃部は磨滅し丸みを帯びる。暗緑色を呈する緑色岩系石材である。隣接する上垣内遺

- 跡では弥生土器・磨製石鏃が出土している。
- 52.白川村荻町上町上（かんまちうえ）より、昭和3年に上手氏により発見されたと記される。全体によ研磨され刃は鋭く、1,110gと重い。明善寺蔵。寺には他に石器類や北陸系・信州系・関東系の縄文中期土器、そして島中通遺跡出土の石器類と水神平式土器破片などが収蔵されている。
- 53.飯島アワラ出土、白川小学校蔵。頭部4分の1と側面の一部を欠失する。全体に敲打痕が残り刃は鈍い。北陸系中期後葉土器を主体とする遺跡で、石冠や刻文入石皿等多数の遺物が採集されている。
- 54.高山市下ノ切町の西蓮寺に収蔵される松岡大寿コレクションの1つ。頭部と刃部を破損するが全体は伺える。敲打痕を多く残り緑色岩系、推定長約20cmである。
- 55.56.高山市の二木酒造旧蔵の重要文化財指定物中、57点の石斧の2点が太型蛤刃石斧である。飛驒出土であることはほぼ間違いない。図はないが写真によると、共に完形で光沢がある。サイズは不明。
- 57.荘川町岩瀬における表採品。小林周平氏発見。全体滑らかに研磨されるが部分的に敲打痕が残る。刃部は斜行し剥落部分もある。明褐色の砂岩製で650gを量る。
- 58.飛驒市宮川町三川原出土と思われる。住健氏旧蔵。上半部がソケット上にすぼまる形をなし、表裏に敲打による径3cmの浅い凹みが備わる（考察項にて解説）。下半部は滑らかな研磨面となっており刃はややにぶい。重量は698gで灰褐色の閃緑岩質である。頭部に少し敲打痕がある。
- 59.同じく三川原出土と思われるがやや大きく1040gを量る。刃部は研ぎ直しにより斜めとなっている。色調は暗褐色を呈する緑色岩系、上半部と頭部に敲打痕を残す。現在の所有者は岩田氏である。
- 60.丹生川町下保河渡より、昭和50年代の土地改良時に石棒・石剣等とともに出土した。下半部2分の1個体で、断面はやや角張る。
- 61.町方千蔵寺出土の完形品で村史に記載がある。刃部はよく磨かれ、断面は卵形でやや厚みが少ない。実見はしていないが榎田型の可能性が高い。
- 62.高山市下ノ切町の西蓮寺に54の資料とともに所蔵される、。明治19年の『千代の鏡』（文献88）に都筑靈源蔵として記載される資料で、最も古い文献となる。暗緑色の蛇紋岩に全体に粗い敲打を加えて整形し、刃の部分に一部研磨の痕跡があるが、刃部形成にまでは至っていない。大きさ・断面形からも、太型蛤刃石斧未成品としての可能性を持つ唯一の資料である（第3図）。出土地と目される大谷向田遺跡は、昭和30年に耕地整理が行われた際に縄文中・後期の土器や石器類が出土している。
- 63.北方山グロ出土。昭和42年の耕地整理の際に、40cmの双頭石棒などとともに出土した。水神平式土器もみられる。頭部を欠く約3分の2個体で推定長19cm、敲打痕を残す。
- 64.高山市松本町の上野平出土とされ、小阪順三氏の祖父が知人から譲り受けたとされる（文献63）。No.12の資料と比較的近い場所であり、その関連が注意される。長さ16cm、重量835g、完形で暗褐色を呈し上半部に浅く敲打痕を残す他は美麗に研磨されて光沢がある。頭部に少し潰れがみられるが刃部は極めて鋭利である。
- 65.山口町中上野出土。大栗田美義氏のコレクション中にみられる。19cmの完形品で側縁は平行する。側縁部と頭部に敲打痕を残し、暗褐色のハンレイ岩製である。遺跡は大栗田家すぐ裏手の段丘上にあり、昭和40年代の土地改良で縄文期の遺物（早・前期）や扁平片刃石斧・磨製石鏃、あるいは平成5年の発掘調査で奈良時代の住居址2基も検出されている（文献62）。
- 66.飛驒市河合町有家（うけ）家ノ腰出土とされ、『下田遺跡』（文献34）に図が掲載されるが、太型蛤刃石斧との明示はない。長さ21.4cm、頭部に向かって細くなり断面は円形に近い楕円である所から、太型と判断した。近接する下田遺跡からは水神平式土器が少量出土している。
- 67.古川町岡前出土。『飛驒市遺跡詳細分布調査報告』（文献74）に図示される9.6cmの小型の完形品である。敲打痕と研磨痕がよく残り、使い込まれて短くなっている。榎田遺跡との関連が指摘されている。

- 68.高山市の照蓮寺にNo.31の資料と共に保管される田近コレクション中のもの。丹生川町下保マキノ出土とされる。頭部が細くなるタイプで刃部はしゃもじ形に丸みを帯び、部分的に敲打痕を残す。15cmあまりの大きさと緑色岩系の石材が用いられているが、縄文期の乳棒状石斧の可能性も考えられる。
- 69.国府町荒城神社にNo.14資料と共に保管されるもので、文献55に写真がある。15.4cmの完形品で全体完全研磨され、黒褐色を呈する。14に比べてやや先細りしている。
- 70.71.下呂市の下島遺跡出土のNo.50資料と共に島田氏に所蔵される2点で、『飛驒下呂』（文献75）に写真のみ紹介されている。大きさや石材は不明であるが玄武岩質の感がある。70は段を有し上半部が先細りしている。ともに刃部は斜行する。
- 72.高山市赤保木町の松葉惣四郎氏所蔵になるもので、赤保木遺跡出土と思われる。刃部に向かって広がりを見せ、断面は楕円形をなす。重さ718g、暗緑灰色を呈する。
- 73.同じく松葉氏蔵。ほぼ完形であるが中央付近に剥落がみられ、11.7cmと小型である。緑灰色を呈し、刃部は鋭い。
- 74.久々野町の『史跡と史話』（文献33）に写真の残る資料で、棚山出土。清水宗二氏所有とあり、堂ノ上資料館に収蔵される。かなり大型の部類で完形品である。久々野町では弥生時代の遺物はほとんど見られない。
- 75.荘川町赤谷遺跡での小林周平氏の表採資料。下半部個体で推定長は15cmである。全体によく磨かれ敲打痕はわずかに残る程度であるが、折損後クサビとして使用されたかのような破損部がみられる。
- 76.高山市上野平出土の記載のある資料で、旧森本古泉コレクションの1つ。現在は売却されている。5箱に計38点の磨製石斧が整理されており、各々出土地が記される。大型定角のものがほとんどであるが、1点先細りタイプのものがあり太型蛤刃石斧と思われる。
- 77.一之宮町内出土とされる資料で、下半3分の2個体、推定長15cmである。刃部も少し欠損する（文献53）。
- 78.下呂市萩原町四美横倉出土。昭和46年の発掘調査の際、東地区より出土した。断面円形で敲打痕を残し、太型蛤刃石斧の可能性がある。他に敲製の長大な石斧も出土しており、報告書では晩期初頭の石斧として記載される。これも太型蛤刃石斧と比して遜色ない切れ味を保持している伐採斧であろう。
- 79.国府町荒城神社蔵として『荒城神社遺跡』（文献46）に写真が紹介される資料で、頭部は少し細まっており面取りもあるが、太型蛤刃石斧として良いと思われる。『県史』（文献22）の第173図9に図示されるものと同一資料であろう。

〔参考資料〕

以上の資料の他、太型蛤刃石斧と考えられる飛驒の資料はいくつか存在し、いつか集成に含めたいと願っているが、今はその可能性を示すにとどめ次の機会を待ちたいと思う。

写真図版3のA・Bに示した資料は、国府町広瀬の岡村健守コレクションの一部で、平成の初め京都国立博物館に寄贈された御物石器・石冠・挟入柱状片刃石斧等を含む多数の遺物のうち、24点ある磨製石斧中の2点である。飛驒出土は確かとともに長さ21cmの大型品であり、太型蛤刃石斧の可能性が高い。

この他、国府町の旧佐藤泰郷所蔵で奈良市丹波市町の木田氏に譲渡された折の記念写真の中に、太型蛤刃石斧が含まれる。天理市の博物館に収蔵されている可能性がある。

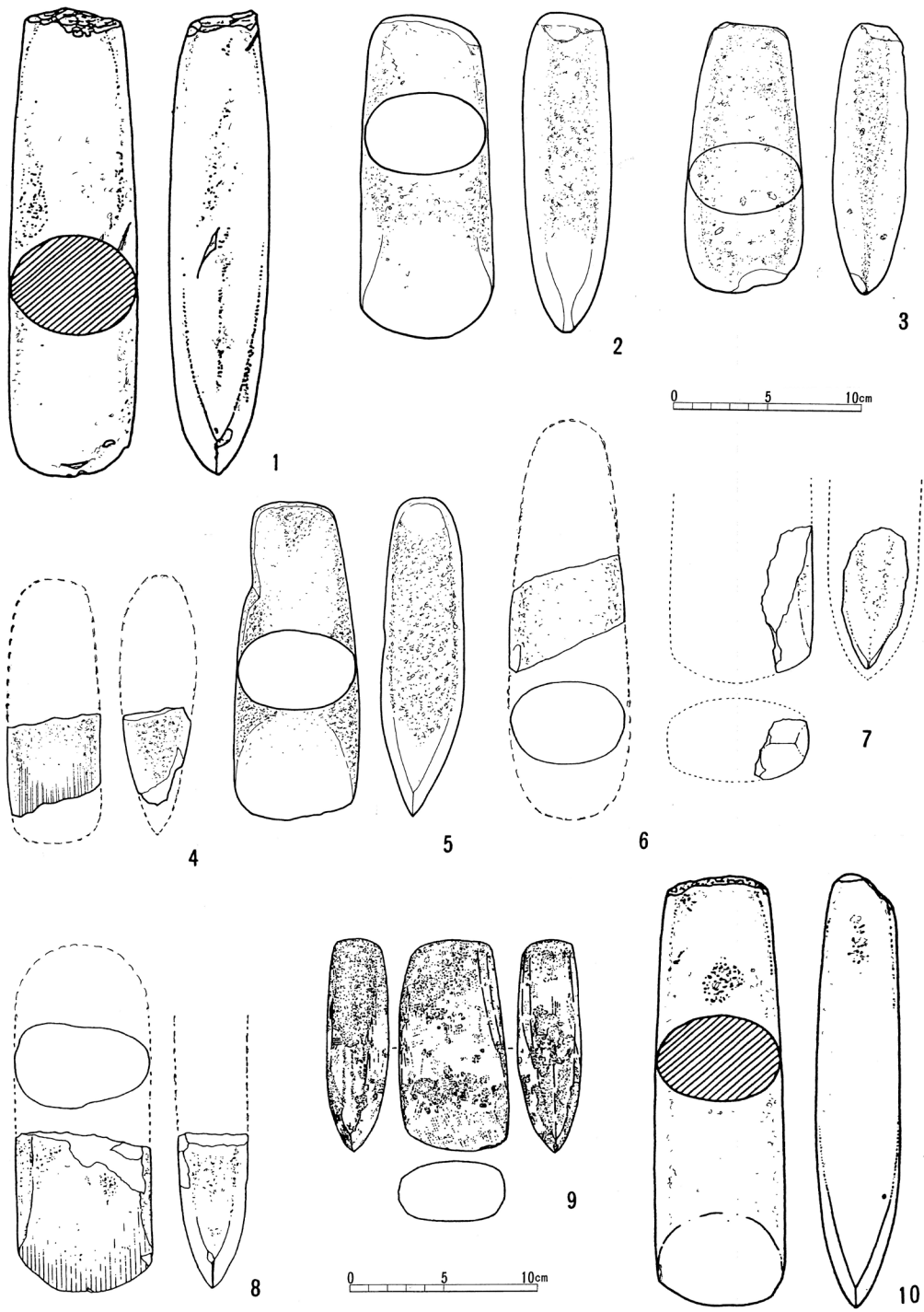
同じく国府町の神官であった藤木繁吉旧コレクションとして、現在西宮市辰馬資料館に収蔵されるものの中に、太型蛤刃石斧が数点含まれる。

さらに、高山市旧永田吉右エ門コレクションが郷浩氏に移譲され、現在岐阜城内資料室に保管されるものの中にも、太型蛤刃石斧が含まれる。

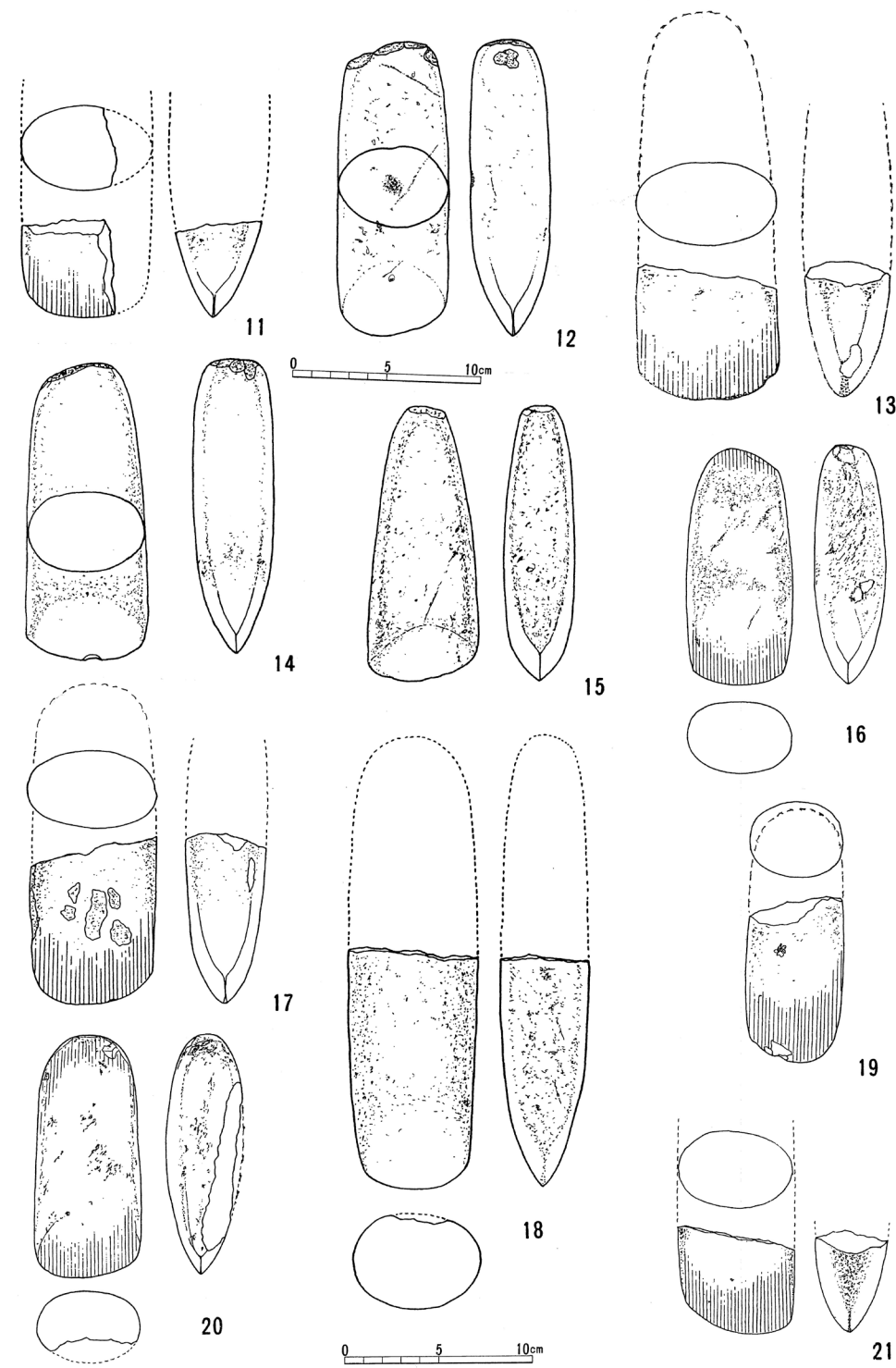
第 1 表 飛驒の太型蛤刃石斧集成表

番号	旧集成	遺跡名	所在地	タイプ	遺存度	長さ	幅	高さ	重量	石質	所有者	文献
1	1	森下	高山市山口町森下	Aa	ほぼ完	240	65	50	1500	砂岩	垣水富郎	69
2	9	赤保木	高山市赤保木町	Cb	完形	179	75	50		砂岩	山崎件造	42
3	10	赤保木	高山市赤保木町	Cc	ほぼ完	150	67	42		緑色岩	山崎件造	42
4	11	赤保木	高山市赤保木町	Ac	⅓	(44)	(40)	(34)		緑色岩	山崎件造	42
5	12	赤保木	高山市赤保木町	Cb	完形	178	71	48		緑色岩	中田吉右ェ門	42
6	13	畑直し	高山市前原町畑直し	Ba	⅓	(40)	(60)	(42)		緑色岩	荒屋直美	65
7	14	内垣内	高山市新宮町内垣内	－	一部					緑色岩	岩花秀明	65
8	26	野内	高山市上切町野内	Ab	⅓	(82)	72	38			成田 co.	65
9	－	ウバヶ平	高山市上切町ウバヶ平	Cd	完形	110	58	32	386	緑色岩	発掘	73
10	2	四十九院	高山市中切町四十九	Aa	完形	221	67	45		緑色岩	山之下万五郎	37
11	27	中切日焼	高山市中切町日焼	－	一部					緑色岩	山本徳重	65
12	44		高山市松本町	Ab	完形	182	69	50	1100	緑色岩	安土孝	54
13	25	ひじ山	高山市江名子町諏訪ヶ洞	Cb	⅓	(70)	76	46			成田 co.	65
14	3	荒城神社	高山市国府町宮地宮垣内	Cb	完形	160	66	44		斑礫岩	荒城神社	37
15	4	石原	高山市国府町上広瀬石原	Bc	完形	150	58	40		斑礫岩	田川裕	37
16	17	西ノ野	高山市国府町上広瀬西ノ野	Ac	完形	124	58	38		蛇紋岩	発掘	65
17	28		高山市国府町三川	Ab	⅓	(76)	58	36		緑色岩	高桑 co.	85
18	34	アワラ	高山市国府町三川アワラ	Aa	⅓	(126)	68	48		緑色岩	松垣作助	65
19	－	殿村	高山市国府町殿村	Ac	⅔	(88)	50	40				55
20	36	立石	高山市国府町漆垣内立石	Cc	⅔	130	58	(40)			発掘	55
21	－	瀧ノ上	高山市国府町瓜巢中洞	Cb	⅓	(50)	(60)	(40)			脇田寿慧	57
22	－		高山市国府町木曾垣内	Ac	完形	156	64	44			阿多由太神社	57
23	－	倉田	高山市国府町山本倉田	Cc	完形	134	70	41		緑色岩	谷口安之	55
24	－	山本和田	高山市国府町山本和田	Cc	完形	130	58	40		緑色岩	和田行雄	55
25	29	岡前	飛驒市古川町岡前								山樵館	65
26	31		飛驒市古川町上気多								山樵館	65
27	－	沢	飛驒市古川町上気多沢	Bc	完形	157	65	44	730	砂岩	小林周平	59
28	40		飛驒市古川町下気多	Cb	完形	151	62	40		緑色岩	村坂又平	59
29	30	上町	飛驒市古川町上町	Cc	完形	158	68	46	867	緑色岩	発掘	65
30	38		飛驒市古川町中野	Bb	完形	172	70	48		砂岩	村坂又平	59
31	－		飛驒市古川町中野	Ba	完形	226	77	55		緑色岩	田近 co.	56
32	39		飛驒市古川町信包中山	Ac	ほぼ完	145	58	40		緑色岩	村坂又平	59
33	－	上町	飛驒市古川町上町	Cd	ほぼ完	92	59	31	262	緑色岩	発掘調査	74
34	16	殿	飛驒市神岡町殿	Bc	完形	120	70	40		緑色岩	神岡城	65
35	5	岩平	高山市清見町三日町	Cd	完形	105	64	38	412	緑色岩	町教委	87
36	6	亀ヶ平	高山市一之宮町亀ヶ平	Cd	完形	107	60	35		カンラン岩	町教委	53
37	－	亀ヶ平	高山市一之宮町亀ヶ平	Bb	ほぼ完	160	60	40		砂岩	町教委	59
38	－	亀ヶ平	高山市一之宮町亀ヶ平	Ab	完形	177	75	50		砂岩	町教委	59
39	15	千蔵寺	高山市丹生川町町方	Ac	完形	154	58	46	800	緑色岩	瀬ノ上尹雄	42
40	20	法力馬場	高山市丹生川町法力馬場	Cc	完形	154	64	40		緑色岩	森和夫	64
41	21	法力馬場	高山市丹生川町法力馬場	Ba	完形	216	70	48		緑色岩	森和夫	64
42	22	法力風野	高山市丹生川町法力風野	Cb	完形	188	88	48		緑色岩	本山明雄	65
43	24	細越広殿	高山市丹生川町細越広殿	Ab	⅔	(92)	58	48			江馬 co.	64
44	23	広殿	高山市丹生川町広殿		破片					緑色岩	寺地 co.	65
45	35	北方広殿	高山市丹生川町北方広殿	Bb	頭少欠	(168)	68	46		緑色岩	丹生川中学校	64
46	41	桐山広殿	高山市丹生川町桐山広殿	Cc	完形	148	68	36		緑色岩	村坂又平	59
47	43	宮ノ前	高山市丹生川町大萱宮ノ前	Bc	ほぼ完	143	47	32			大萱神社	49
48	－		下呂市金山町福来	Cb	⅓	(100)	69	44		砂岩	福応寺 co.	－
49	8		下呂市萩原町奥田洞	Ba	完形	230	70	50			角竹文庫	37
50	37	下島	下呂市乗政下島	Ba	完形					玄武岩	島田良作	75
51	－	寺垣内	下呂市馬瀬寺垣内	Cc	完形	134	58	38		緑色岩	二村幸男	57
52	18	上町上	大野郡白川村荻町	Bb	完形	182	70	46	1110	閃緑岩	明善寺	65
53	19	アワラ	大野郡白川村飯島	Ab	⅔	(136)	68	45			白川小学校	65
54	7		飛驒	Bb	⅔	(150)	70	48	(740)	斑礫岩	西蓮寺	37
55	32		飛驒		完形						二木 co.	65

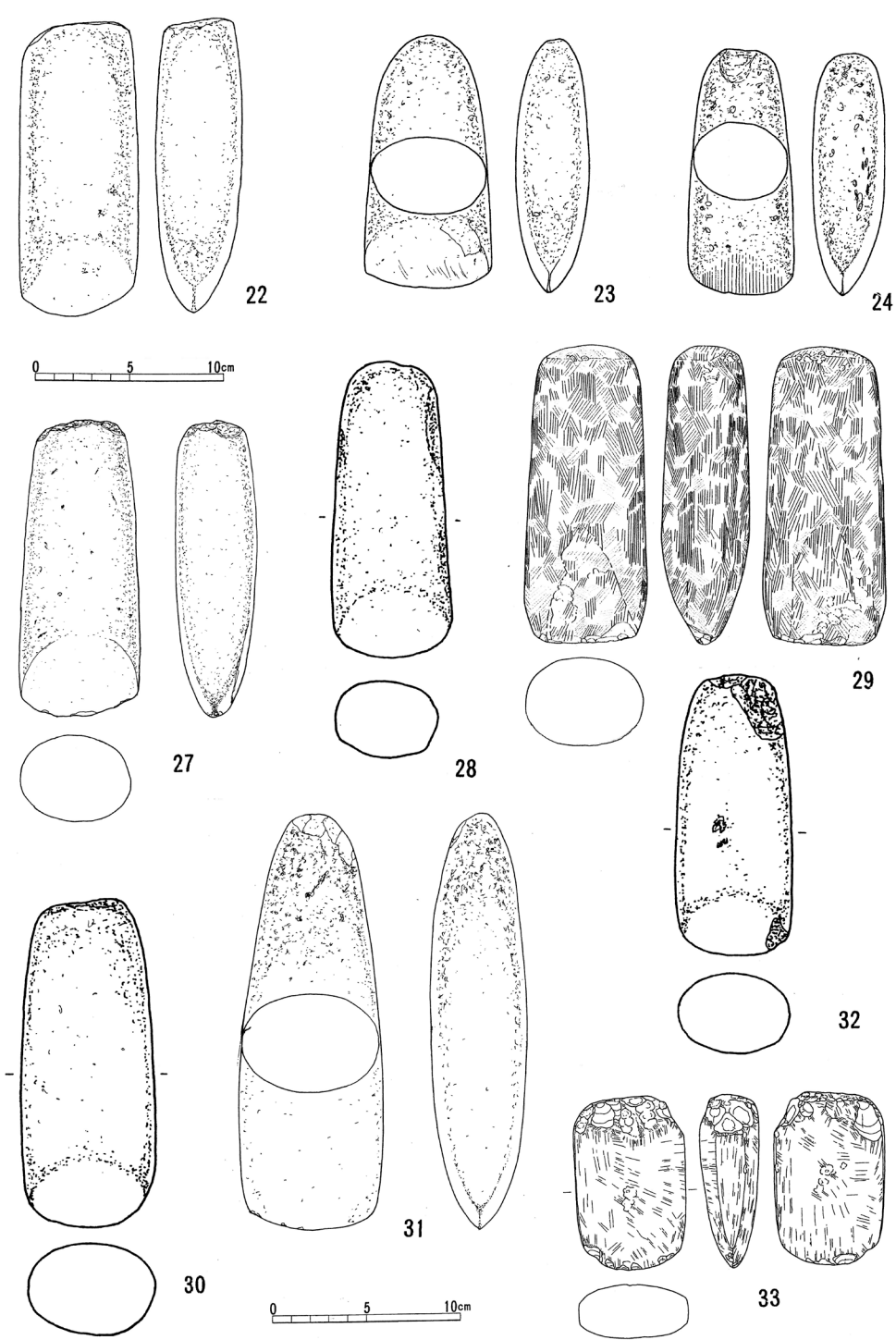
番号	旧集成	遺跡名	所在地	タイプ	遺存度	長さ	幅	高さ	重量	石質	所有者	文献
56	33		飛驒		完形						二木 co.	65
57	－	下道	高山市荘川町岩瀬	Ac	ほぼ完	158	60	45	650	砂岩	小林周平	－
58	－		飛驒市宮川町三川原	Cc	完形	136	70	48	698	緑色岩	住健	59
59	－		飛驒市宮川町三川原	Cb	完形	176	72	50	1040	緑色岩	住健	59
60	－	河渡	高山市丹生川町下保	Cb	⅓	(88)	58	30		緑色岩		49
61	－	千蔵寺	高山市丹生川町町方	Ab	完形	193	68	45				59
62	－		高山市丹生川町大谷	Ba	完形	238	74	52		蛇紋岩	西蓮寺 co.	88
63	－	山グロ	高山市丹生川町北方	Bb	⅔	(110)	60	40			大谷信応	59
64			高山市松本町	Cb	完形	160	62	50		緑色岩	小阪順三	63
65		中上野	高山市山口町中上野	Ac	完形	140	60	38		斑礫岩	大栗田美義	62
66	－	家ノ腰	飛驒市河合町有家	Ba	完形	214	70	52				34
67	－	岡前	飛驒市古川町岡前	Cd	完形	96	62	44	425	緑色岩	市教委	74
68	－	マキノ	高山市丹生川町下保	Bc	完形	150	54	－		緑色岩	田近 co.	56
69	－	荒城神社	高山市国府町宮地宮垣内	Cc	完形	154	58	－		緑色岩	荒城神社	－
70	－	下島	下呂市乗政下島	B	完形						島田良作	75
71	－	下島	下呂市乗政下島	B	ほぼ完						島田良作	75
72	－	赤保木	高山市赤保木町	Cc	完形	152	64	38	719	緑色岩	松葉惣四郎	－
73	－	赤保木	高山市赤保木町	Cd	ほぼ完	(117)	53	39	(349)		松葉惣四郎	－
74	－	棚山	高山市久々野町棚山	Ba	完形						清水宗二	33
75	－	赤谷	高山市荘川町赤谷	Bc	⅓	(85)	52	39	(252)	緑色岩	小林周平	－
76			高山市上野町	Bb	完形						森本 co.	－
77	－		高山市一之宮町	Bc	⅔	(86)	46	34			町教委	53
78		横倉	下呂市萩原町四美	Ac	⅔	(101)	47	41			発掘	70
79		荒城神社	高山市国府町宮地宮垣内	Ab	完形						荒城神社	46



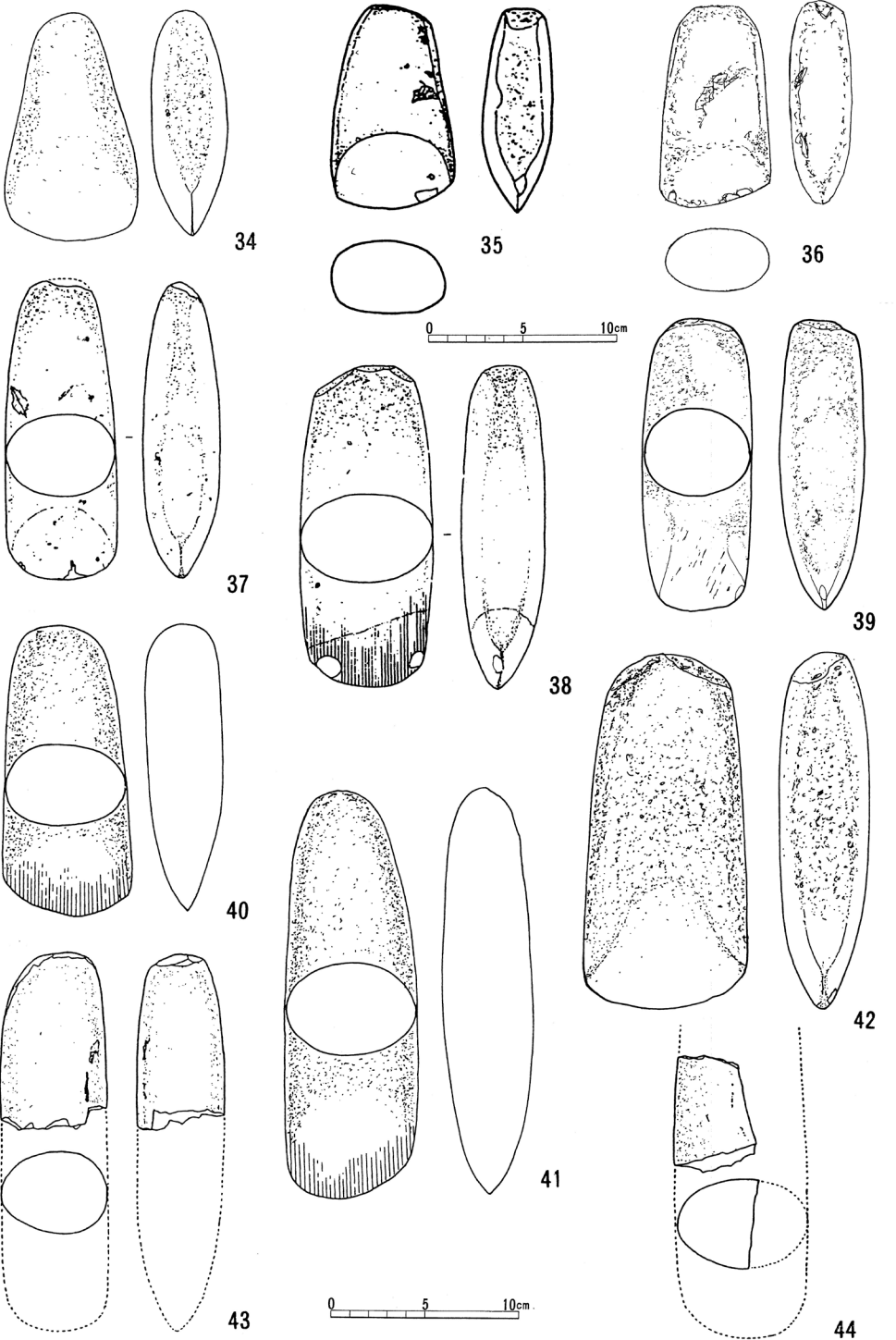
太型蛤刃石斧集成図版1



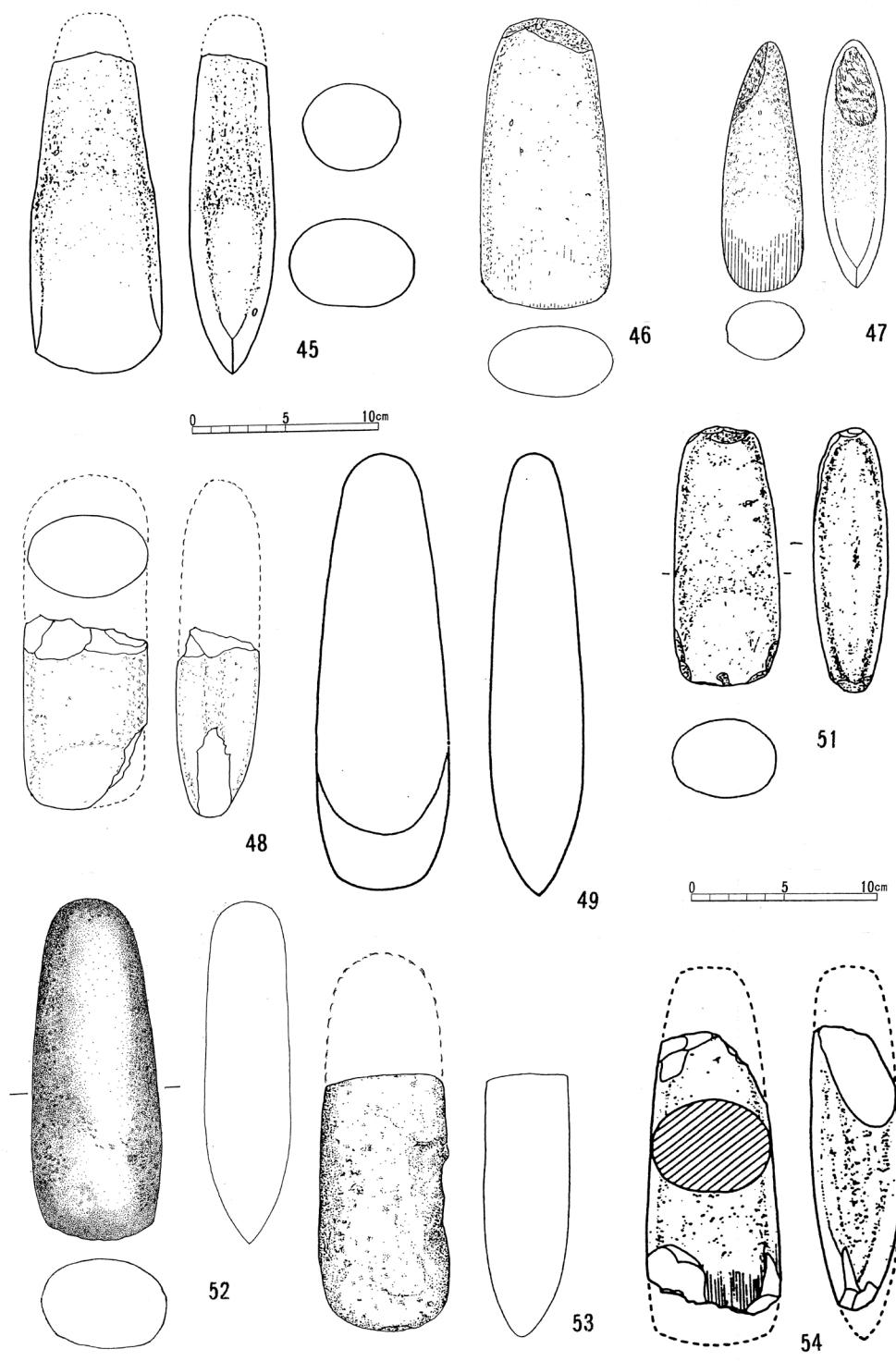
太型蛤刃石斧集成図版2



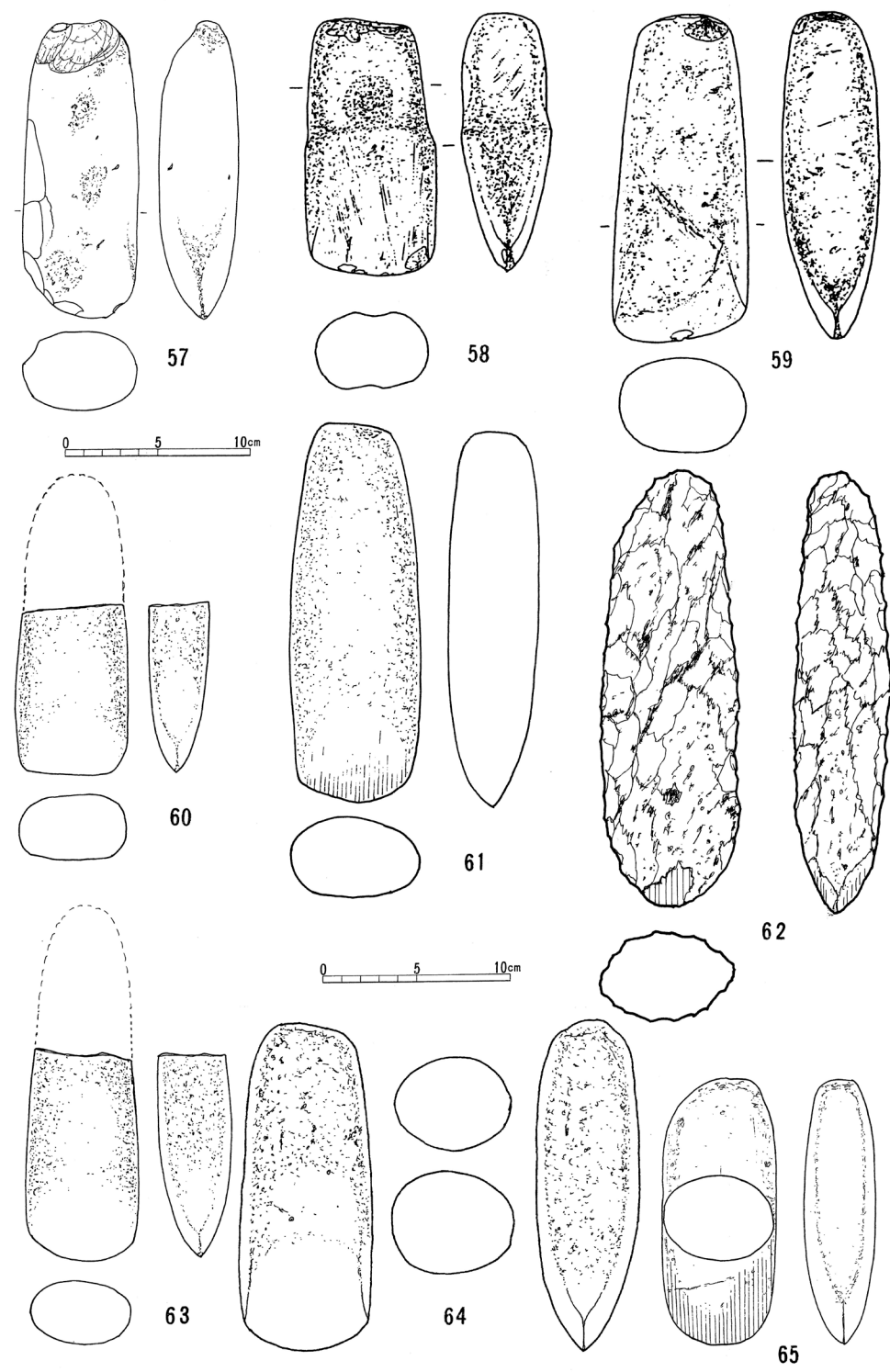
太型蛤刃石斧集成図版3



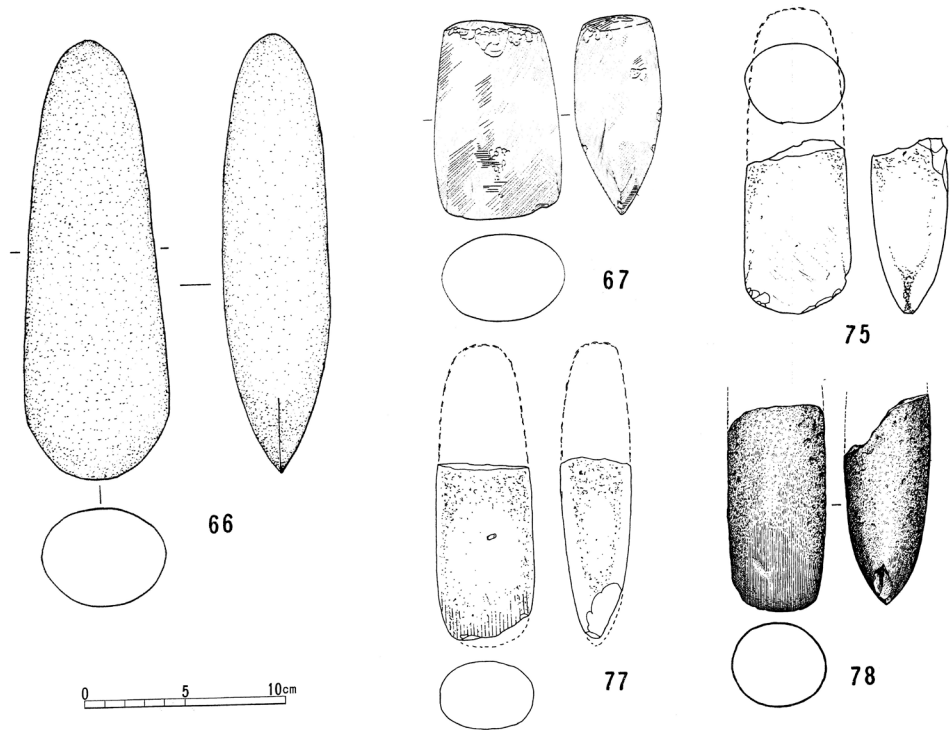
太型蛤刃石斧集成図版4



太型蛤刃石斧集成図版5



太型蛤刃石斧集成図版6



太型蛤刃石斧集成図版7

5,考察

以上、79 点の太型蛤刃石斧資料について考察を加えてみたい。

まず大きさについては、a：20cm 以上が 11、b：16 ～ 20cm が 26、c：12 ～ 16cm が 28、d：12cm 以下が 5、不明 7 である。それぞれ 14%、33%、36%、6%、11% で、c が最も多く b がこれに次ぐ。d の中には研ぎ減りの結果もあると思われる。刃部角で判断されよう。

タイプ別では、A：20、B：24、C：28、不明 7 で、刃部に最大幅のあるタイプが多い。しかし数値はかなり接近している。グラフによる所見（図 5、6）では、それぞれのタイプによる長さ と 幅、幅 と 厚さの比率がよくまとまった分布を示しており、その規格性が感じられる。Cd タイプは、研ぎ減り個体の多さを示している。資料 No.9・23・35・36・67 など が該当する。

遺存度については、完形ないしほぼ完形が 55、2 分の 1 以上遺存が 14、2 分の 1 以下が 5、その他 5 で、完形に近い個体が 7 割を占める。ちなみに縄文中期の垣内遺跡の場合、磨製石斧 303 点中使用に耐えうる個体は 35% で、大型のものほど遺存度が悪いとされる（文献 76）。定角石斧と比して太型蛤刃石斧は折れにくい形状・太さであることは確かであろう。未成品がほとんどみられないという事は、完成品が搬入された事を示す重要部分である。地元で製作された様な痕跡は今のところ見られないが、この点は抉入柱状片刃石斧や一部の磨製石鏃と同様の傾向を見ることが出来る。他方、全てのものが実用品であったかという点も問題となる。埋納事例に関しては後述する。

刃部遺存度に関しては、鋭利さをとどめている個体が 24 あり、潰れているもの 16 と比して割と多い。切れ味を保つためにも、研ぎ直しの繰り返しは当然であったろうが、それにしても多いのは不思議である。刃の片寄る扁刃個体には、10 点あまりが知られる（No.19・21・36・40・41・57・59 など）。

頭部に敲打痕を残す個体については、観察は十分と言いつたが少なくとも 2 割の個体に顕著な敲打痕（潰れ）が残り、加工痕というよりはむしろ使用痕とみなされる。当然クサビ的な使用法が考えられるが、実際の使用法は分からない（註 1）。筆者としては、伐採時あるいは板材分割の際の工程の中で、時にクサビとして木槌で頭部を叩く事もあったのではないかと考えている。その際、刃部が鋭く胴部に厚みがある程効果的と考えられ、胴部が特に滑らかに磨き上げられている事も、効率とかかわるかも知れない（註 2）。

石斧砥石の出土例は聞かないが、一般的には手持ち砥石による即席的な研ぎ直しが普通であろうし、大きな破損に対する本格的な研ぎ直しなどは、むしろ河原などで自然石を用いて行った方がより妥当と考えられる。縄文期における大型石斧砥出土数の少なさも、これを裏付けている。

重量の判明している個体は 17 点（破損品を含む）と多くはないが、最高 1,500g、最軽 262g である。1kg を超すと考えられる個体は、長さが 20cm 以上である a タイプの 10 個体程度が考えられ、20cm 未満でも（b タイプ）1kg を超えるものが 2 点ある。重さは、巨木伐採における重要な要素であったと思われ、鉄器への転換を必要としない、あるいは遅らせる程十分な機能を発揮したのであろう。ちなみに太型蛤刃石斧の重量が 1kg を超えるのは、弥生前期末から中期初頭にかけて以降といわれる（文献 89）。

石質について、砂岩以外の石材については分類の項で述べた様に、緑色岩系石材と表記することがより適格と考え、それに従ったが一部出典の記述も尊重した。統計的には緑色岩系（ここでは閃緑岩・ハンレイ岩）と記載されたもの 44、砂岩 8、蛇紋岩 2（註 3）、不明 25 で、緑色岩系の多さがうかがわれる。

砂岩・蛇紋岩は地元飛驒でも容易に入手できる石材であり、特に蛇紋岩は上宝町・清見町方面で良質なものが存在する。ちなみに飛驒の縄文中・後期遺跡の磨製石斧の石材例を参考にしてみるならば、例えば荘川町赤谷遺跡の 79 点の場合、蛇紋岩 48%、砂岩 38%、安山岩 7%、その他 7% である（文献 77）。丹生川町岩垣内遺跡の 182 点の場合では蛇紋岩 73%、砂岩 9%、凝灰岩 7%、その他 13%（文献 78）といった具合に、蛇紋岩の圧倒的な多さが看取される。ところが同じく西田遺跡では、233 点中蛇紋岩 70%、凝灰岩 13%、

ハンレイ岩 12%、砂岩 3%、その他 2%としてハンレイ岩が明記してある（文献 79）。地質学に詳しい岩田修氏（飛驒考古学会）によれば、ハンレイ岩は飛驒でも産出し、その鑑定については十分信用度が高いとされる。

蛇紋岩が地元の石材を使用した可能性は高いが、未製品や加工場等の実証の乏しい現状では、北陸方面からの搬入も否定はできない。同様に太型蛤刃石斧も、地元のハンレイ岩のみが使用されたとは断定できないでいる。しかし堅くて重量のあるこの石材が特に選択されていた事は確かであり、信州方面からの搬入の問題については、加工法などの技術の点で立証される部分に期待がもたれる。

分布については地図で示したように（図 8）、高山・国府・古川の沖積地にその 8 割以上が集中し、特に宮川水系の集中度は高く飛驒川・高原川・荘川水系はごく稀である。当然、弥生遺跡分布とも相関し、飛驒地方の主要な弥生遺跡の分布域である。馬場氏によれば、高山盆地の弥生中期・後期集落の立地に関しては、内垣内式期は谷水田部に面した段丘もしくはその裾部に偏る傾向があり、移動性の高い居住形態とされる。それが後期後半以降、広大な沖積地に集落が形成され、特に赤保木・野内遺跡一帯には比較的長期の集落が存在した状況と、信州系土器の多さが交流拠点的な側面を示唆している、と述べられる（文献 60）。赤保木遺跡周辺における太型蛤刃石斧の多さは、これを裏付けるものであろう。

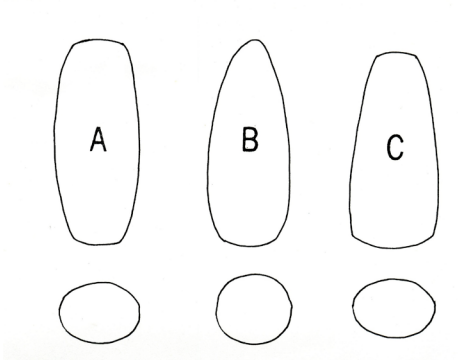
ただ発見状況において、遺構を伴う発掘出土例は今のところ見られず、むしろ集落周辺での散発的な発見によるものが多いようである。現代的に解釈するならば、例えば作業区域・貯木場的な空間でのその存在・収納などを考える理由ともなろう。いずれにしても栗林式土器の分布がそのメルクマールとなるが、砂岩系の円筒斧の系譜についてはまだ検討の段階には至っていない。

埋納例について、No.31 や No.49 の例にみられる様な所見は、ともに大型品である点に大きな要素があり、筆者もかつて文献 68 で言及した事がある。即ち、学生時代丹後半島での調査において、久美浜町の公民館に保存される太型蛤刃石斧・挟入柱状片刃石斧・石鎌・扁平片刃石斧のセットの埋納例である（第 4 図）。この報告で言及されているのは「象徴的な儀礼行為」がなされたと想定される点と、「これら 4 点の石器は、その機能そのものよりももの自体に意味があったのではないかと推測せしめると考えられ」、「意図的に大きさをそろえて作出した可能性がある」と指摘されている事である。つまり 3 点がそれぞれ 24.9cm、24.5cm、24.3cm、扁平片刃石斧がその半分の 12.4cm に仕上げられているのである（文献 80）。これを飛驒の例にあてはめてみると、No.31 が 22.6cm、No.49 が共伴した挟入柱状片刃石斧と同じ 23.0cm で、かなり近似した数値である。参考までに日本計量史学会の岩田重雄氏の発表資料を要約すると、「—20 世紀に使用された標準尺の 1 尺の長さは、中国大陸・朝鮮半島・日本列島の 3 地域で 30 ～ 32cm である。ただ B.C.5000 年頃の中国では 17cm であったとされ、次第に伸びていく。朝鮮・日本では 2 世紀後半から伸び始め、伸びがやや安定するのが 3 地域共、7 世紀後半であった。日本は紀元前 3 世紀から 1 尺の平均値は 23.1cm と、ほぼ安定している—」とある（文献 81）。これによれば、17cm の倍数は縄文尺として理解出来、弥生尺は 23cm 位であることがわかる。

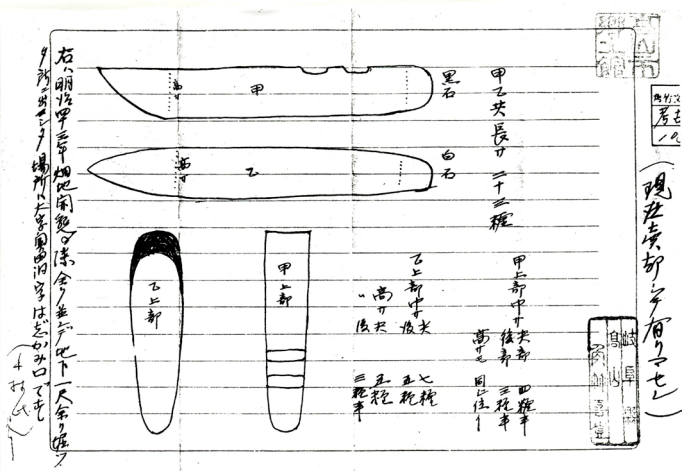
他の埋納例をみると、大阪府池上曽根遺跡では長さ 22.2cm の太型蛤刃石斧が多数のサヌカイト剥片に包まれた状態で出土した埋納例がある。他方、福島県平窪諸荷遺跡の土坑墓等に埋納された 2 例をみると、大きさはまちまちであり刃部に使用痕が観察されるものが少なくない、とある（文献 82・83）。従って、埋納品の規格についてはなお多くの類例と検討を要するが、少なくとも大型の太型蛤刃石斧の一部が実用具としてではなく、儀器として作られた可能性は考慮に入れておかねばならない。

この他、特徴的な資料についての他の研究者の見解が筆者に寄せられており、紹介しておきたい。No.58 の三川原資料について、「どっこいし」94 号での集成を見た石川日出志氏より次の様な見解をいただいた。即ち、「石戈から変形石戈を経て斧刃付刃からやがて東関東の有角石器に至るプロセスを考える上で、重要な実例と思われる」とされ、長野県の西一本柳遺跡の変形銅戈形石製品との類似資料として注目されるという。馬場氏もその論文（文献 84）において同様の見解を述べておられ、栗林式土器分布図における祭祀行為の共通

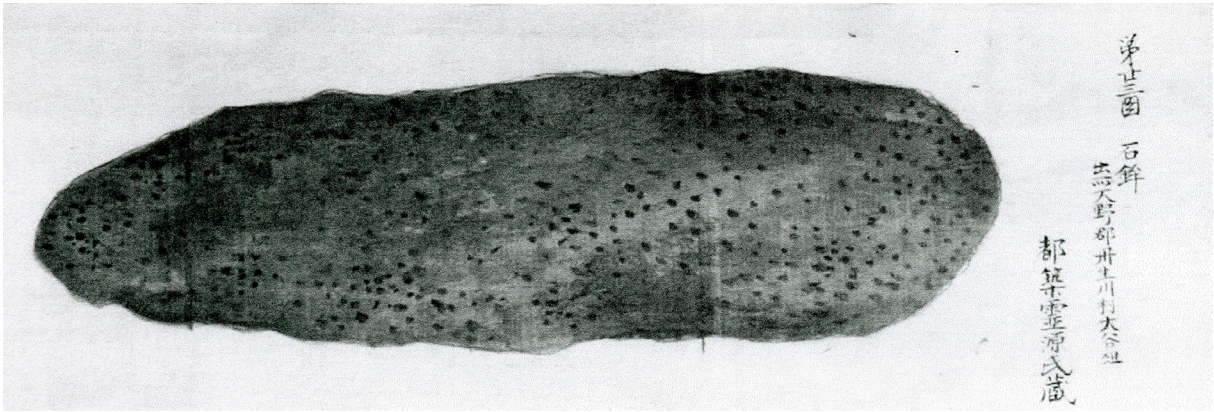
性にまでかかわるものと考えられるという。榎田遺跡から直線距離にしてちょうど 100km にある三川原資料がどのような経路で伝わり、今後どの様に解釈されるのか、一層の研究に期待が持たれる。



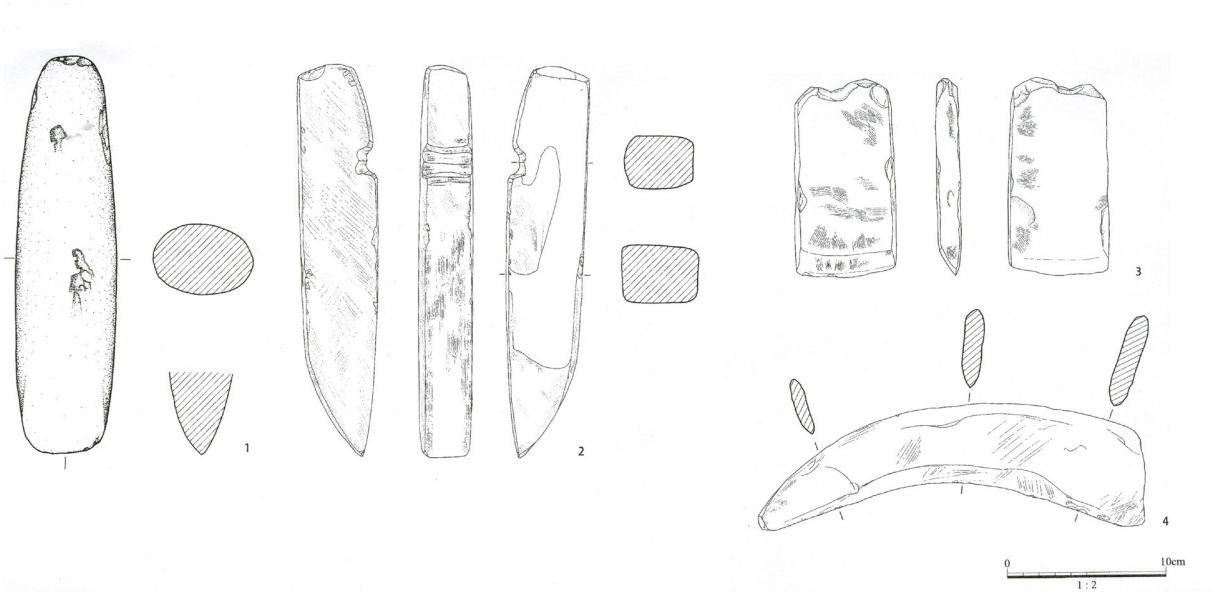
第1図 太型蛤刃石斧形態分類



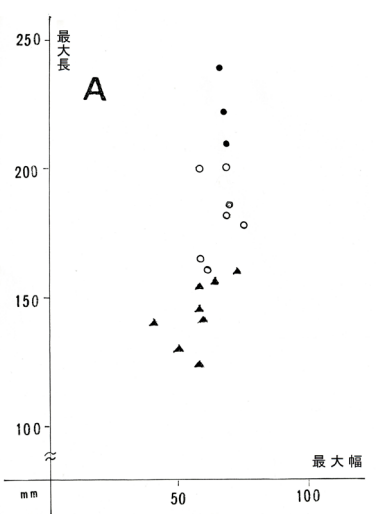
第2図 文献36の太型蛤刃石斧



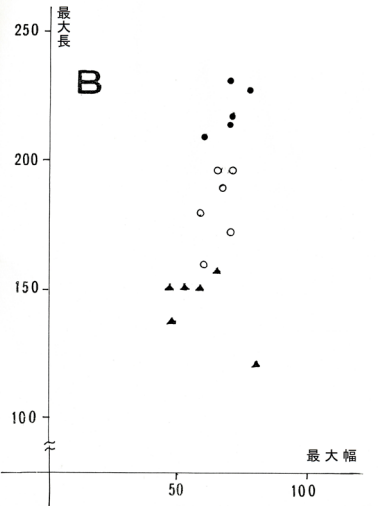
第3図 『千代の鏡』所収のNo.62資料



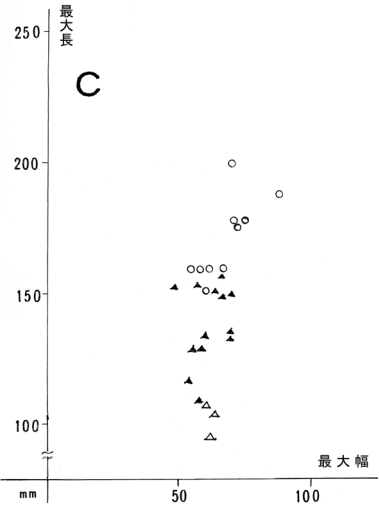
第4図 芦原遺跡出土の埋納資料(文献80)



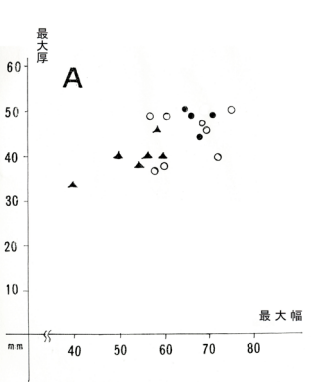
第5図 太型蛤刃石斧の長幅比A



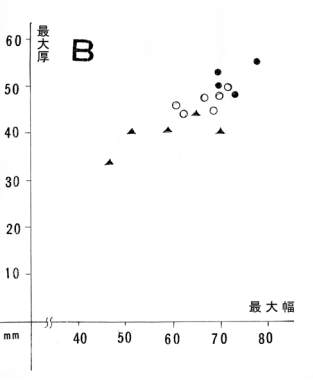
第5図 太型蛤刃石斧の長幅比B



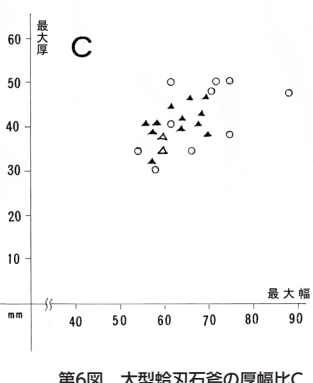
第5図 太型蛤刃石斧の長幅比C



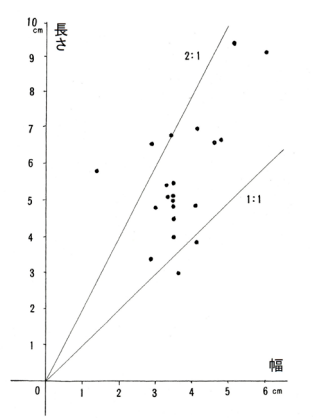
第6図 太型蛤刃石斧の厚幅比A



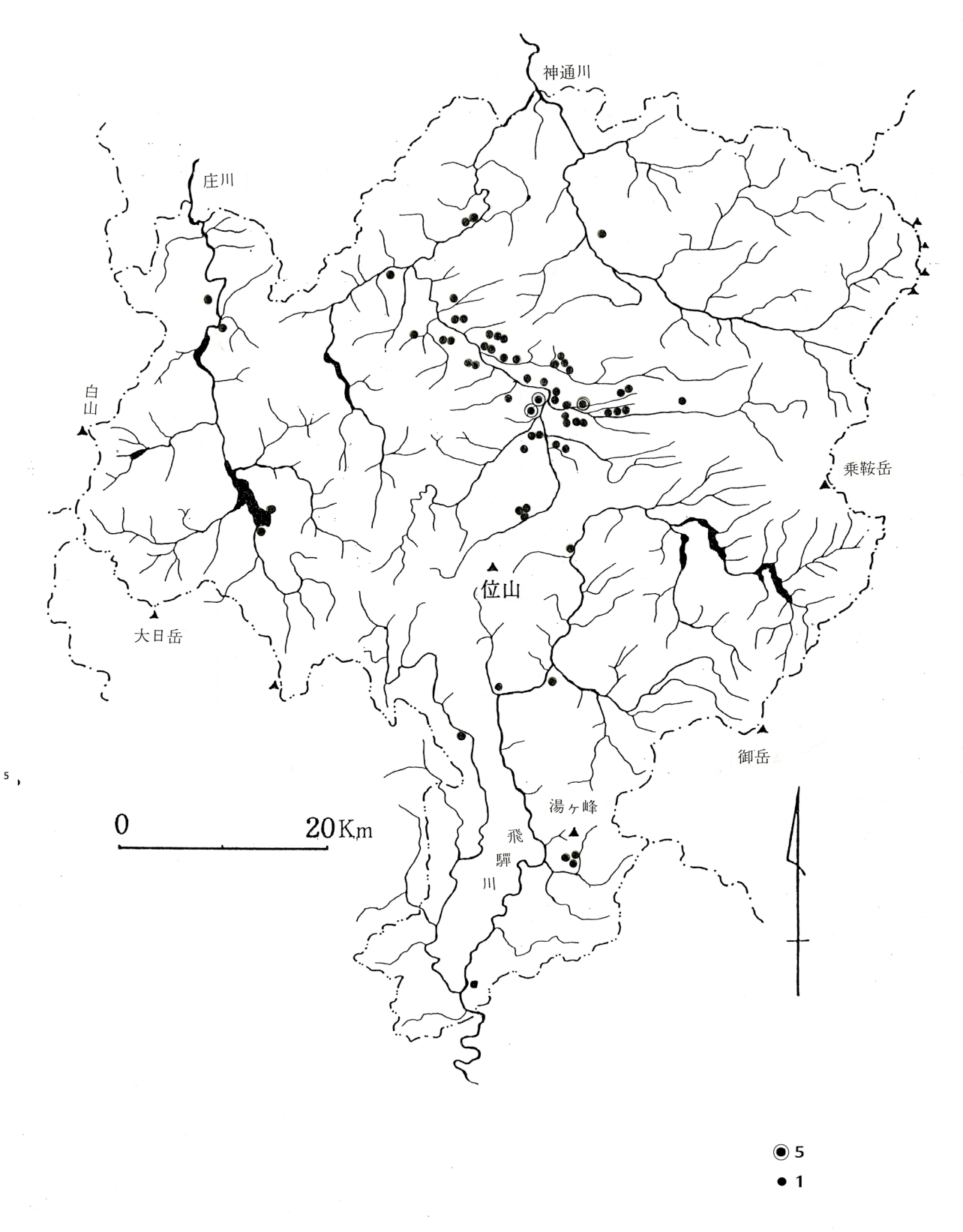
第6図 太型蛤刃石斧の厚幅比B



第6図 太型蛤刃石斧の厚幅比C



第7図 扁平片刃石斧の長幅比



第8図 太型蛤刃石斧分布図

6,おわりに

飛驒の太型蛤刃石斧について、種々の見解を述べてきたが、筆者が最初に 8 点の集成を行ってから早くも 30 年余りの年月が経っている。何ら知見のない当時の認識度の浅さから、石器観察の不備な点は否めないが、幸いにして当時目にした資料の多くが、現在も保全されている事に少々安堵している。本集成を機に、新たな目的意識を持った研究が若い研究者によってなされる事を期待している。

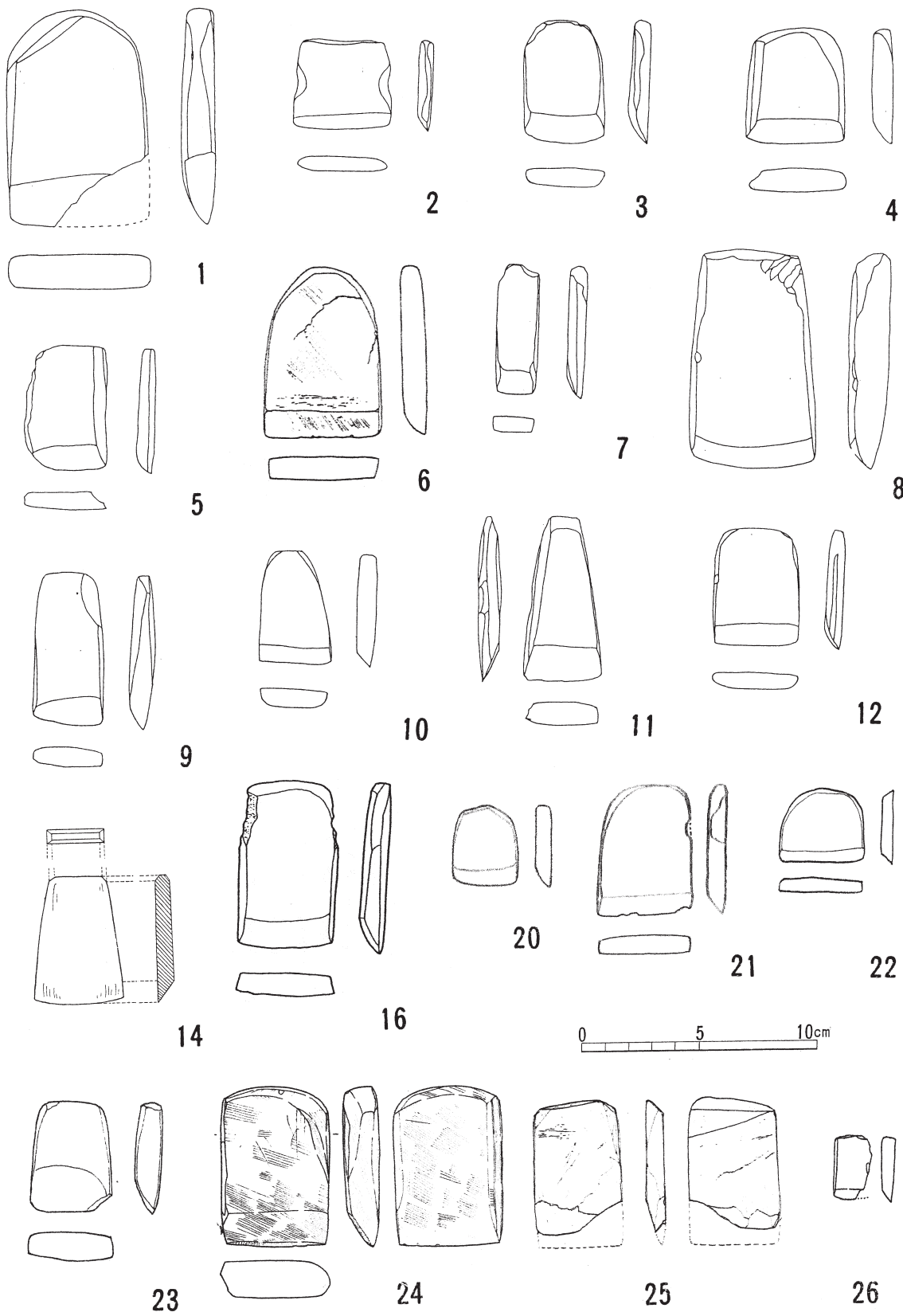
それにつけても、飛驒から流出した魅力ある考古資料の数々に対し、改めてその散逸を惜しむとともに、再度の研究の機会が与えられる事を望むものである。今後の発掘調査で得られる可能性の少ない遺物群であるだけに、今ある資料の保全・記録の努力が期待される。それが、これらの貴重な資料を残してくれた先学の方々へのせめてもの感謝の返礼であり、我々の義務であると感じる次第である。

この他大陸系磨製石斧群（挾入柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・石庖丁・磨製石鏃・磨製石剣等）については、紙数の都合上、出土遺跡と図を提示するに留め、尚後の研究の機会に譲りたいと考える。末筆ながら、発表の機会を与えて下さった光ミュージアムに対して、深甚の謝意を表するとともに、協力を戴いた方々の名を記し、感謝の意にかえるものである。

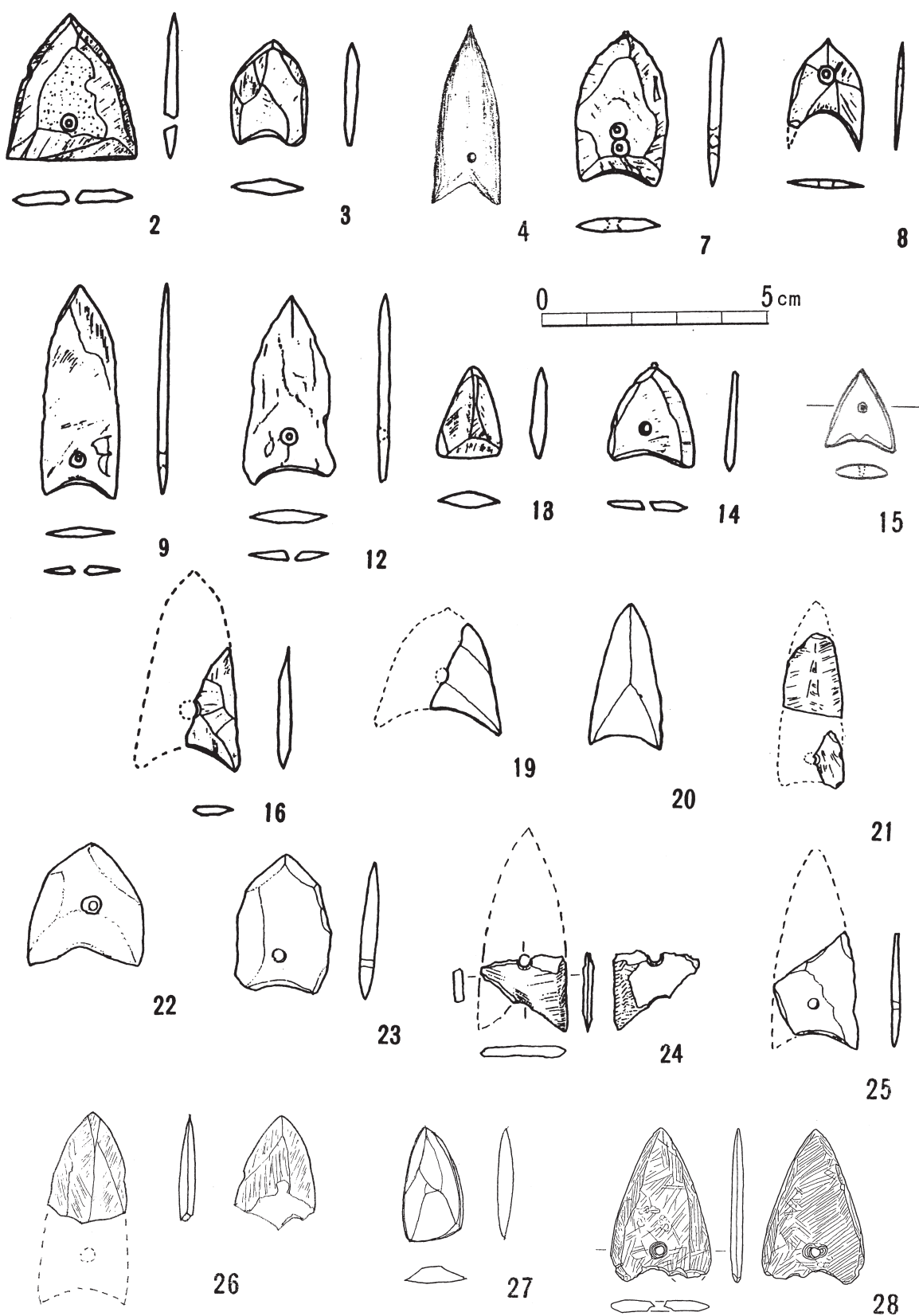
石川日出志 馬場伸一郎 岡本孝之 岩田勲 岩田修
高山市教育委員会 飛驒市教育委員会 下呂市教育委員会

〔脚注〕

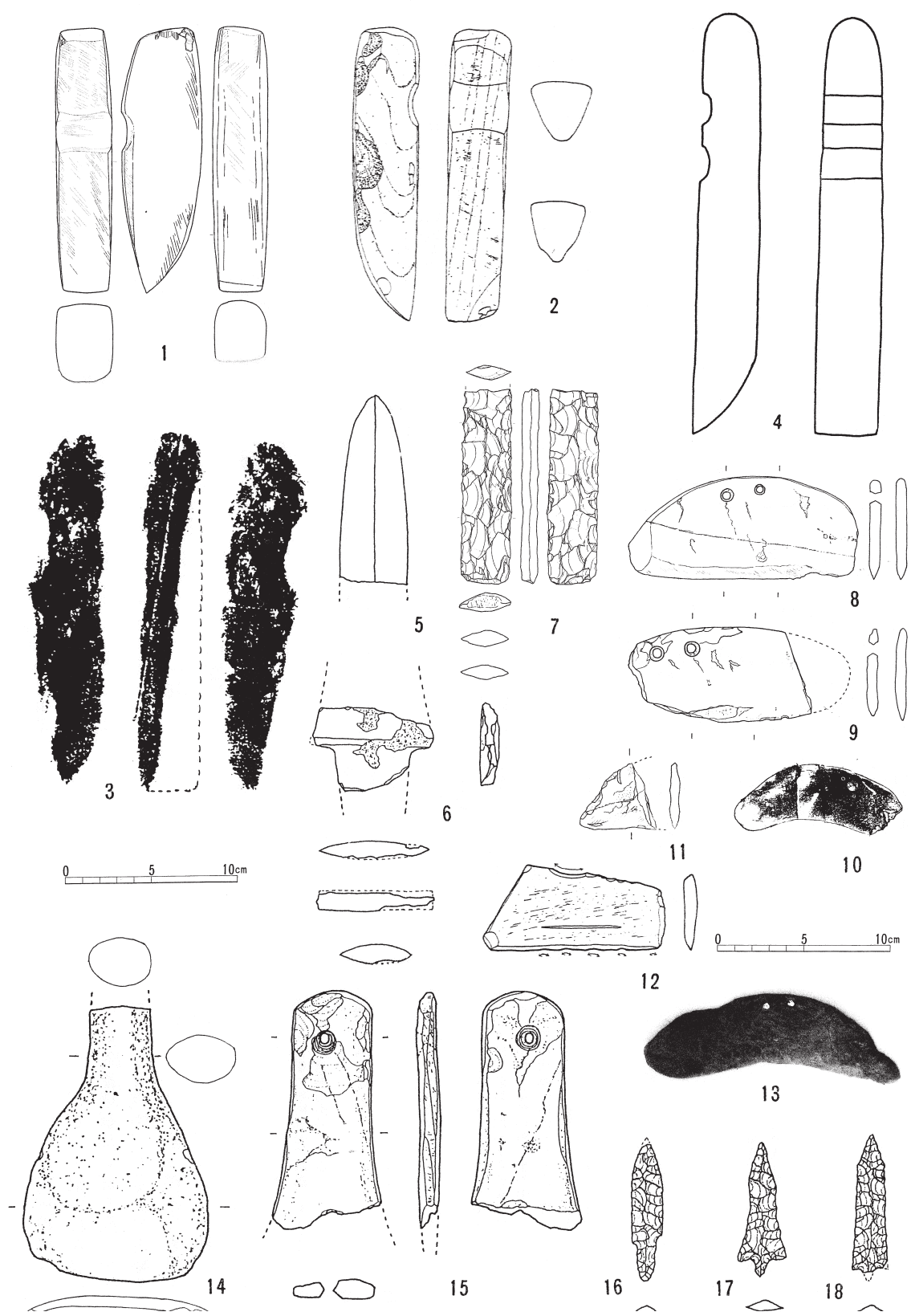
- 1.馬場氏文献72の註3に記述のあるように、加工の敲打痕が使用の結果の敲打痕であるのか分別はできないとされる。ただ破損後の個体のクサビ転用例は、縄文期の資料に特に乳棒状石斧に多く見られるようである。
- 2.成田寿一郎氏「木の匠―木工の技術史―」『新・飛驒の匠ものがたり』Ⅱ（飛驒木工連合会 平21.5.10）に依れば、木材の割裂性は針葉樹ほど大きく、また乾燥によってさらに増大するとあり、製材時（半割・四ッ割）における楔の使用は必然かつ経済的であるとされる。また木の楔は入手が容易である点で有効とされる。ただ、大きな裂け目がない限り諸段階での斧の使用は必要と思われる。
- 3.従来蛇紋岩と呼ばれていた石材が、多くの場合透閃石岩である事が判明しており、外見上の区分も難しいことから、慣習的に用いられていることも酌量して、総称としての「蛇紋岩類」と呼ぶことが提唱されている。（中村由克「旧石器時代における石斧の石材鑑定」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』第19号 2011）



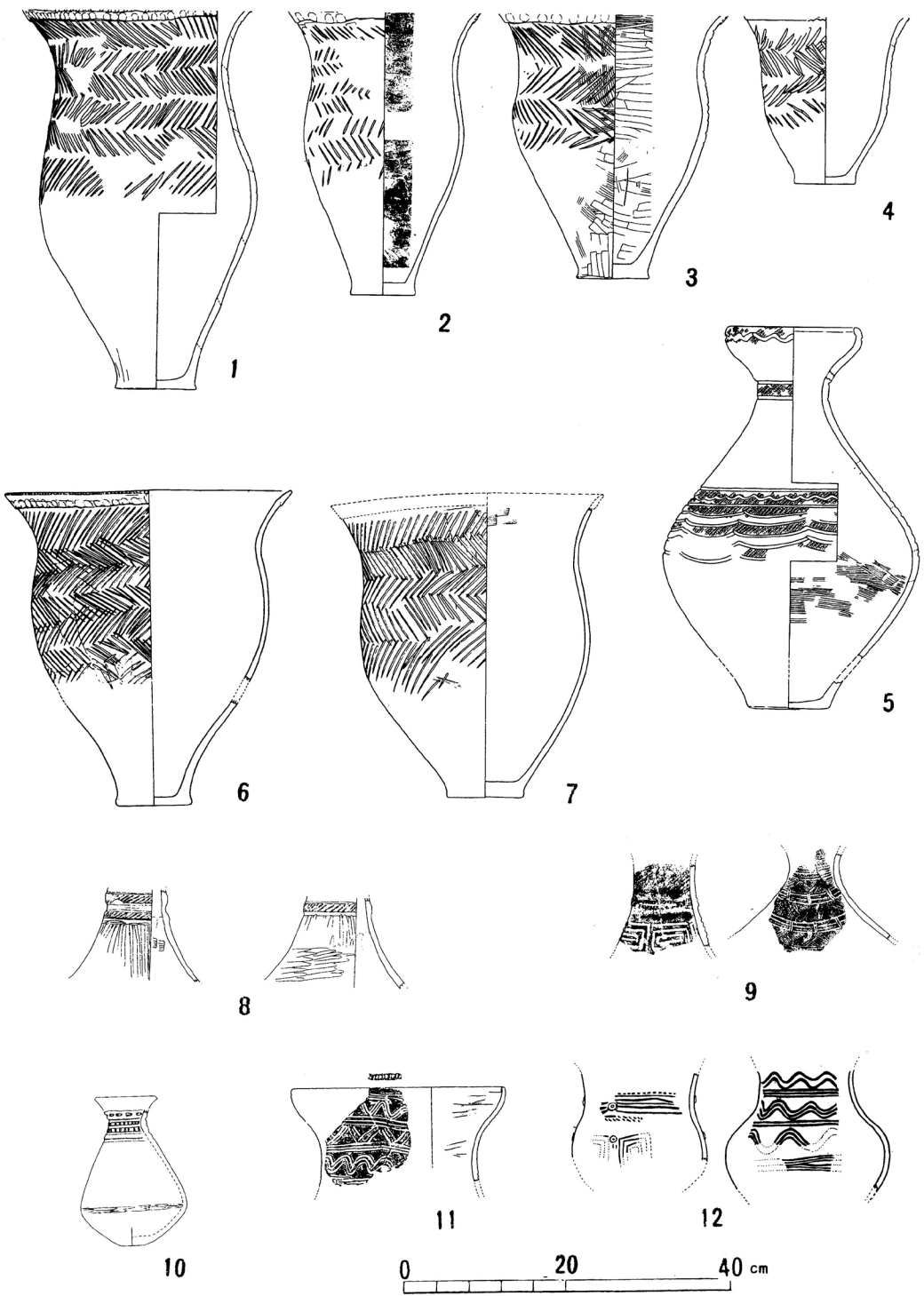
第9図 飛驒の扁平片刃石斧集成



第10図 飛驒の磨製石鏃集成



第11図 飛驒の弥生時代石器集成



第12図 飛驒の主要弥生土器(主に中期)

飛驒の弥生時代遺物集成

〔扁平片刃石斧〕 図版

- 1. 高山市江名子町
- 2. 高山市江名子町
- 3. 高山市江名子町
- 4. 高山市新宮町内垣内
- 5. 高山市新宮町内垣内
- 6. 高山市下切町下田
- 7. 高山市中切町日焼
- 8. 高山市岩井町滝
- 9. 高山市山口町
- 10. 高山市清見町牧ヶ洞
- 11. 高山市荘川町海上
- 12. 飛驒市宮川町林
- 13. 高山市国府町半田垣内
- 14. 高山市江名子町泉水
- 15. 高山市荘川町新洲
- 16. 高山市上切町トチモト
- 17. 高山市松ノ木町みせの
- 18. 高山市江名子町薬師野
- 19. 飛驒市古川町上気多
- 20. 高山市国府町三日町山ノ下
- 21. 高山市丹生川町大萱宮ノ前
- 22. 高山市山口町中上野
- 23. 下呂市小坂町湯屋
- 24. 高山市上切町ウバヶ平
- 25. 高山市一之宮町砂畑巾
- 26. 高山市前原町畑直し

〔磨製石鏃〕 図版

- 1. 高山市江名子町向畑
- 2. 高山市江名子町向畑
- 3. 高山市新宮町内垣内
- 4. 高山市西之一色町山王洞
- 5. 高山市山口町
- 6. 高山市岩井町
- 7. 高山市岩井町
- 8. 高山市上野町垣内
- 9. 高山市国府町三川上ノ段
- 10. 高山市国府町三川落合
- 11. 高山市国府町上広瀬洞ノ口
- 12. 飛驒市宮川町西忍宮ノ前
- 13. 飛驒市河合町羽根
- 14. 高山市清見町牧ヶ洞
- 15. 高山市一之宮町山下亀ヶ平
- 16. 高山市朝日町見座釜野
- 17. 高山市久々野町渚
- 18. 下呂市馬瀬中切上垣内
- 19. 高山市朝日町見座釜野
- 20. 高山市久々野町小屋名
- 21. 高山市国府町瓜巢保別戸
- 22. 下呂市森
- 23. 下呂市萩原町上村
- 24. 下呂市金山町岩瀬岩屋
- 25. 下呂市金山町岩瀬岩屋
- 26. 下呂市金山町岩瀬岩屋
- 27. 高山市山口町中上野
- 28. 飛驒市古川町上気多

〔石庖丁〕 図版

- 1. 高山市三福寺町落（8）
 - 2. 高山市山口町森下（9）
 - 3. 高山市下ノ切町狐洞（10）
 - 4. 高山市江名子町矢林薬師野（11）
 - 5. 高山市前原町畑直し（12）
 - 6. 高山市上切町野内 C（13）
 - 7. 高山市上切町野内 B
- 〔挟入柱状片刃石斧〕
- 1. 高山市国府町蓑輪（1）
 - 2. 高山市中切町（2）
 - 3. 飛驒市古川町杉崎（3）
 - 4. 下呂市萩原町奥田洞（4）

〔磨製石剣〕

- 1. 飛驒市古川町上気多（5）
- 2. 高山市江名子町畑館址（6）

〔石槍〕

- 1. 高山市上宝町宮原（7）

〔有肩石斧〕

- 1. 下呂市馬瀬大野（14）
- 2. 高山市国府町上広瀬宮ノ下（15）

〔打製石鏃〕

- 1. 高山市新宮町内垣内（16）
- 2. 高山市新宮町内垣内（17）
- 3. 高山市松ノ木町みせの（18）

〔代表的な弥生式土器〕

- 1～5. 高山市上切町ウバヶ平
- 6. 下呂市乗政下島
- 7. 高山市新宮町内垣内
- 8. 高山市国府町立石
- 9. 高山市一之宮町亀ヶ平
- 10. 高山市上宝町
- 11. 高山市森下町山口
- 12. 高山市千島町サンネガ洞

飛驒弥生関連文献目録

- 1. 笠原烏丸
 - 2. 飛驒考古学会
 - 3. 笠原烏丸
 - 4. 山内清男
 - 5. 森本六爾
 - 6. 加藤輝次
 - 7. 飛驒考古学会
 - 8. 赤木清
 - 9. 吉田富夫
 - 10. 赤木清
 - 11. 杉原荘介
 - 12. 赤木清
 - 13. 赤木清
 - 14. 梅原末治
 - 15. 多賀秋五郎
 - 16. 国府町
 - 17. 岩溪山
 - 18. 岐阜県教育委員会
 - 19. 成瀬満
 - 20. 大江まさる
 - 21. 宮村
 - 22. 岐阜県
 - 23. 下呂町教育委員会
 - 24. 萩原町教育委員会
 - 25. 高山市教育委員会
 - 26. 下呂町教育委員会
 - 27. 高山市教育委員会
 - 28. 犬塚みつ
 - 29. 高山市教育委員会
 - 30. 小嶋準一他
 - 31. 下呂町教育委員会
 - 32. 馬瀬村教育委員会
 - 33. 久々野ふるさと文庫
 - 34. 河合村教育委員会
 - 35. 国府町教育委員会
 - 36. 吉朝則富
 - 37. 吉朝則富
 - 38. 吉朝則富
 - 39. 吉朝則富
 - 40. 吉朝則富
 - 41. 吉朝則富
 - 42. 吉朝則富
 - 43. 岐阜県文化財保護センター
 - 44. 高山市教育委員会
 - 45. 岐阜県文化財保護センター
 - 46. 岐阜県文化財保護センター
 - 47. 高山市教育委員会
 - 48. 石川日出志
 - 49. 藤本健三
 - 50. 白川村
 - 51. 吉朝則富
- 1932 「飛驒国初発見の弥生式土器に就て」『考古雑誌』 22-7
 - 1933 「雑報」『会報二』
 - 1933 「飛驒川上川右岸に発見せる弥生式土器（1）」『考古学』 4-3
 - 1934 「江名子ひざ山の土器について」『飛驒考古学会会報』 2-1
 - 1934 「江名子ひざ山土器の問題其一」『石冠』 2-3
 - 1934 「単純弥生式遺蹟内垣内と山王洞」『石冠』 2-4
 - 1935 『飛驒石器時代遺蹟地名表』
 - 1936 「宮村ぬけ洞の土器」『ひだびと』 4-3
 - 1936 「ひじ山の弥生式土器を観て」『ひだびと』 4-10
 - 1936 「江名子ひじ山の石器時代遺蹟」『ひだびと』 4-11
 - 1937 「飛驒高山市附近の弥生式土器の様相について」『ひだびと』 5-4
 - 1937 「高山市上岡本西ノ山の弥生式遺蹟」『ひだびと』 5-5
 - 1937 「飛驒大野郡上枝村新宮の弥生式遺蹟」『ひだびと』 5-6
 - 1940 「飛驒上呂出土の銅鐸」『ひだびと』 8-9
 - 1941 『飛驒史の研究』
 - 1959 『国府村史』 全
 - 1961 「高原郷の弥生式遺跡について」『飛驒春秋』 6-8
 - 1962 『岐阜県遺跡目録』
 - 1964 「小坂町出土の顔面把手と水神平式土器」『飛驒春秋』 9-10
 - 1965 『飛驒の考古学』 I
 - 1968 『宮村史』
 - 1972 『岐阜県史』 通史編原始
 - 1973 『峰一合遺跡概報』
 - 1974 『飛驒桜洞沖田』
 - 1978 『ツルネ遺跡発掘調査報告書』
 - 1980 『図録飛驒下呂』
 - 1981 『薬師野遺跡発掘調査報告書』
 - 1981 『犬塚行蔵飛驒考古学遺稿』
 - 1982 『向畑遺跡発掘調査報告書』
 - 1985 「あまいだ平の水神平式土器」『どっこいし』 19
 - 1985 『下島遺跡』
 - 1985 『馬瀬村の埋蔵文化財』
 - 1987 『史跡と史話』
 - 1987 『下田遺跡』
 - 1988 『宮ノ下遺跡発掘調査報告書』
 - 1989 「飛驒の弥生時代石器」(1)『どっこいし』 31
 - 1989 「飛驒の弥生時代石器」(2)『どっこいし』 32
 - 1990 「飛驒の弥生時代石器」(3)『どっこいし』 33
 - 1990 「飛驒の弥生時代石器」(4)『どっこいし』 34
 - 1990 「飛驒の弥生時代石器」(5)『どっこいし』 35
 - 1991 「飛驒の弥生時代石器」(6)『どっこいし』 36
 - 1991 「飛驒の弥生時代石器」(7)『どっこいし』 37
 - 1993 『阿弥陀堂遺跡・裏垣内遺跡』
 - 1993 『前平山稜・赤保木遺跡発掘調査報告書』
 - 1993 『深沼遺跡』
 - 1993 『荒城神社遺跡』
 - 1994 『江馬修菟集品図録』
 - 1995 「飛驒の弥生中期横羽状文甕」『飛驒と考古学』
 - 1997 『丹生川村史』 資料編 1
 - 1998 『白川村史』 上巻
 - 2000 『上枝村史』

52. 下呂町教育委員会

2003 『峰一合遺跡』

53. 町川克己・吉朝則富

2004 『宮村史』 通史編

54. 吉朝則富

2004 「太型蛤刃石斧の新資料」『どっこいし』 77

55. 吉朝則富

2007 『国府町史』 考古・指定文化財編

56. 吉朝則富

2008 「高山市照蓮寺田近コレクション見学記」『どっこいし』 89

57. 吉朝則富

2009 「飛驒の考古学遺物集成について」『どっこいし』 91

58. 吉朝則富

2009 「斧の文化史」『飛驒の匠ものがたり』Ⅱ

59. 吉朝則富

2010 「太型蛤刃石斧の追加資料」『どっこいし』 94

60. 馬場伸一郎

2014 "「飛驒地方の弥生時代を外からの視点で考える」 飛驒考古学会研究発表資料 "

61. 高山市

2016 『高山市史』 先史時代から古代編上・下

62. 吉朝則富

2016 「大栗田コレクション見学記」『どっこいし』 112

63. 吉朝則富

2018 「太型蛤刃石斧の追加資料」『どっこいし』 116

(追補)

64. 藤本健三

1994 「小八賀川流域の太型蛤刃石斧」『どっこいし』 46

65. 吉朝則富

1994 「太型蛤刃石斧の追加集成」『どっこいし』 46

66. 吉朝則富

1992 「飛驒の弥生時代石器」『飛驒春秋』 376 号

67. 吉朝則富

1992 「高山市の縄文時代遺跡 15. 森下遺跡」『飛驒春秋』 381 号

68. 吉朝則富

2014 「新刊紹介と雑考」『どっこいし』 106

69. 赤木清

1938 「大八賀村山口の森下遺蹟 (1)」『ひだびと』 6-4

70. 萩原町教育委員会

1972 『飛驒横倉』

71. 町田勝則

1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』 12

72. 馬場伸一郎

2003 「榎田型磨製石斧の再検討」『埼玉考古』 38

73. 岐阜県文化財保護センター

2010 『ウバヶ平遺跡・ウバヶ平古墳群』

74. 飛驒市教育委員会

2019 『飛驒市遺跡詳細分布調査報告』

75. 下呂町

1980 『飛驒下呂』 図録

76. 高山市教育委員会

1991 『垣内遺跡』

77. 飛驒考古学会旧石器部会

2008 「赤谷遺跡の遺物 3. 磨製石斧」『どっこいし』 89 号

78. 岐阜県文化財保護センター

2000 『岩垣内遺跡』

79. 岐阜県文化財保護センター

1997 『西田遺跡』

80. 天野末喜他

2014 「久美浜町芦高神社付近出土の石器について」『同志社考古』 13

81. 岩田重雄

2001 "「東アジアの長さの計量の起源ー特に日本についてー」
『第 12 回計測連合シンポジウム先端計測 2001 資料集』より "

82. 文化庁

2005 『発掘された日本列島 2005』 朝日新聞社

83. 文化庁

1999 『発掘された日本列島 1999』 朝日新聞社

84. 馬場伸一郎

2011 "「栗林式土器分布圏の石器・石製品と弥生中期社会」
『長野県考古学会会報』 138・139 合併号 "

85. 吉朝則富

1992 「高桑藤一郎氏コレクション見学記」『どっこいし』 41 号

86. 国府町教育委員会

1996 『立石遺跡』 概報

87. 清見町

1976 『清見村誌』

88. 佐藤泰郷

1886 『日本古物小集会図録 千代の鏡』

89. 下條信行

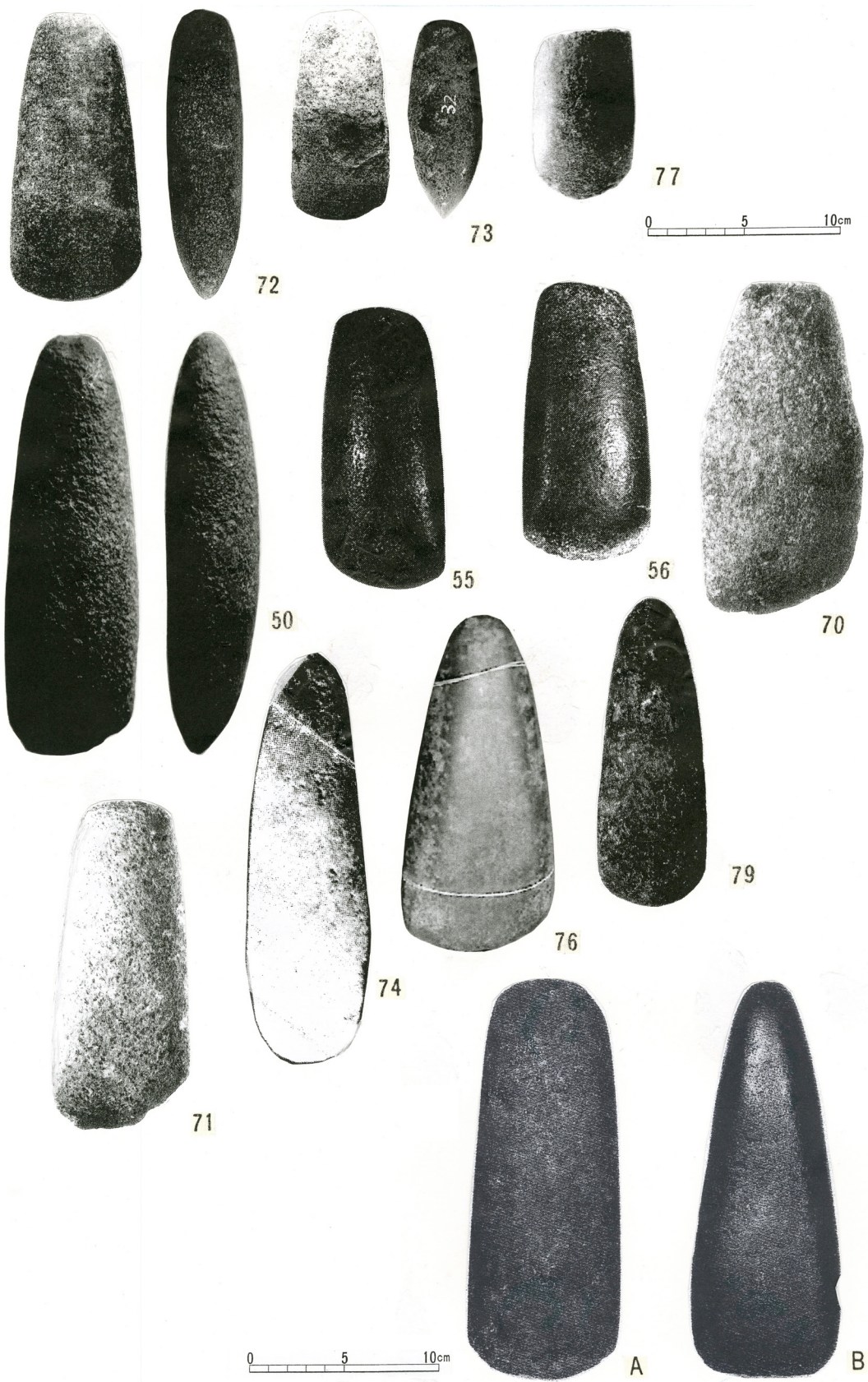
1985 「伐採石斧」『弥生文化の研究』 5 道具と技術Ⅰ 雄山閣



写真図版1



写真図版2



写真図版3

重要美術品「猿丸集断簡」について

元光ミュージアム 学芸員 天野 千穂子

当館では、中世から現代までの書を約 300 点所蔵している。その中から、重要美術品である伝 藤原行成筆「猿丸集断簡」について紹介する。

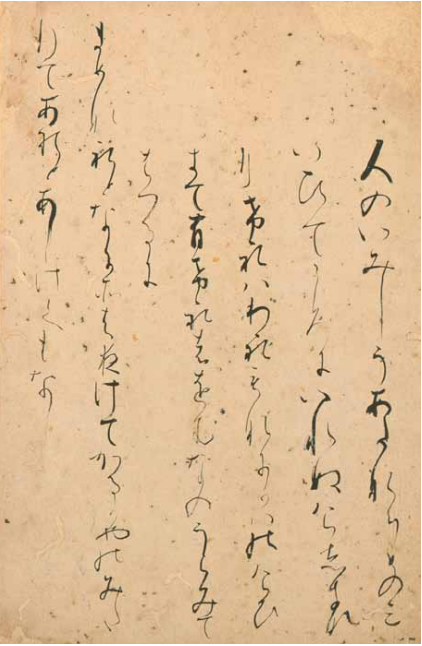


図1 猿丸集断簡(重要美術品)

人のいみしうあ多那りとの三
いひてころ爾いれぬ介志支那
り希れ八われも那爾可八能介ひ
支て有希れ者をむなのうらみて
者へる爾
まめ那れとな爾所者夜けてかる可や能み多
れてあれとあしけくもなし

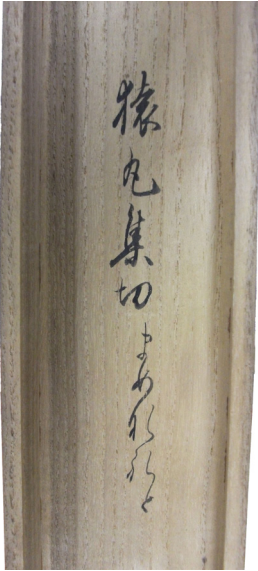


図2 箱書1



図3 箱書2

1.和歌とは

和歌とは、古来より日本で詠まれた韻文で、漢詩に対して日本固有の詩歌のことをいう。日本の歌という意味で大和歌ともいう。5 音と 7 音を基調とする長歌、短歌、旋頭歌、片歌などの総称としても使われる。狭義では 31 音を定型とする短歌を指す。古くは倭歌とも表記し、また倭詩とも称した。漢詩・詩論の影響を受けて歌学・歌論が起こり、日本の詩歌として発展した。

奈良時代には貴族の歌のほか東歌や防人歌など民衆の歌を収めた「万葉集」が成立する。平安時代に入ると最初の勅撰和歌集「古今和歌集」が編纂され、宮廷詩としての地位を確立し、以後室町時代の「新続古今和歌集」に至るまで、長く日本文学の根幹として尊重されてきた。

しかし、和歌は 5・7・5・7・7 の 31 字という固定された形式と宮廷詩という制約から、詠まれる内容や表現においても完全に自由なものではなかったといえる。中世後期には和歌から連歌が独立、また近世には連歌から俳諧が派生した。それぞれその時代の詩歌として変化し、より広い階層の人々に享受されたといえる。近代に入ると、歌の内容、表現について革新が起こり、和歌に代わって「短歌」と呼ばれるに至る。

2.古筆切について

いにしえの人々によって書写され、読み継がれてきた歌集や物語、記録などの写本は、「古筆」として愛好された。室町時代末期から江戸時代以降、茶の湯の流行とともにそれらの名筆が意匠として愛好されるようになり、床に飾ったり、手鑑や屏風に貼ったりするために卷子本や冊子本を切断するようになった。

また、古写本は貴重なものであり、その一部だけでも手に入れたい、という要望が高まった結果、書物としてのまとまりを重んじるというより、少しでも多くの人の手に渡るようにと古写本が分割されるようになっていった。

このようにして切り取られた古筆を古筆切と呼ぶ。また、断簡とも、切ともいう。代表的な古筆切に、「古今和歌集」写本の高野切がある。

本稿で紹介する書は、「猿丸太夫集」の写本を一部切り取ったものであり、「猿丸集断簡」あるいは「猿丸集切」と呼ばれている。

3.重要美術品について

重要美術品は、文化財保護法施行以前、旧「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」に基づき日本政府（文部大臣）が、日本国外への古美術品の流出防止を目的として認定した有形文化財のことである。

1950 年の文化財保護法施行をもって旧法律は廃止された。しかし、それまでに認定された重要美術品については、文化財保護法施行後も当分の間その認定効力を保つこととされている。これにより、文化財保護法施行以降、重要文化財に「格上げ」指定された物件、またさらに重要文化財から国宝に「格上げ」指定された物件以外の大部分が、現在でも重要美術品として認定効力を保ち続けている。

なお、「猿丸集断簡」は、昭和 12 年 8 月 28 日に文部省より重要美術品認定を受け、現在に至っている。

4.猿丸集について

「猿丸太夫集」はもともと、三十六歌仙の一人に数えられる猿丸太夫の私家集とされていた。しかし、後の研究によって、前半に万葉集の異体歌および出典不明の伝承歌を、後半に古今和歌集の読人知らず歌を収めた雑纂古歌集であるとされるようになった。

猿丸太夫という名は古今和歌集真名序に現れるのが文献上の初出といわれ、以来、藤原公任の三十六人撰や藤原定家の小倉百人一首によって広く知られるようになった。が、生没年も伝記も不明であり、また現存の猿丸集中に彼の詠作と認められるものはないため、伝説上の人物という見方が一般的である。

5.猿丸集の伝本について

猿丸集の伝本は次の二系統に分類されている。（『新編 国歌大観』角川書店による）

第一類	
(一)	書陵部蔵甲本
(二)	書陵部蔵乙本
(三)	書陵部蔵丙本・西本願寺本・群書類従本
(四)	書陵部蔵丁本
第二類	
(一)	書陵部蔵戊本
(二)	歌仙家集本・陽明文庫蔵本

なお、伝 藤原行成筆「猿丸集断簡」は、当館所蔵の作以外にも数点が現存する。今はすべて断簡になっているが、もとは冊子本であったといい、本文は西本願寺本などとほぼ一致するため、同系統と見ることができると考えられている。

6.藤原行成について

藤原行成は平安時代中期の天禄 3 年（972 年）に藤原北家、右少将・藤原義孝の長男として生まれた。能吏として一条天皇、執政 藤原道長の両方に信任され、正二位・権大納言にまで昇った。

当代の能書として小野道風・藤原佐理とともに三蹟の一人に数えられ、その書は権蹟と称された。行成の真跡と認められるものは、「白楽天詩巻」「本能寺切」など、漢字体のみであり、仮名文字はおそらく彼が書いたであろうといわれるものばかりであり、本稿で紹介する書もこれにあたる。

藤原行成筆といわれる仮名文字は、彼の漢字体の書と同様に落ち着いてゆっくり入念に字形を書いたらしいとされる。そして運筆に緩急の変化があり、優麗典雅であると評される。

伝 藤原行成筆とされる書跡に「関戸本古今和歌集」がある。これは書風からは行成の筆らしいとはいえないが、用筆が変化に富み、優れていることから、彼の書跡とされている。現存する「猿丸集切」の書風もまた、これと同じような傾向であることから行成の書跡といわれるようになったようだ。

7.和歌の解釈について

詞書に「のけひきて」とあるが、調べたかぎりでは他に用例がないため、その部分の意味が判然としないが、だいたい以下のように解釈できる。

まず、詞書の部分の解釈は以下のようになる。

恋人である女性が私（男性）のことを「ひどく不誠実だ」とだけ言って気に入らない様子であるので、私も「何のことか」と相手にしないでいたら、女性がそれを恨んで

それに続く和歌の解釈として、

あなたに対して私（女性）はまじめであるけれど、その何がよいものか。刈り取った萱が乱れて置いてあるように恋に乱れる状態である（他の人に浮気する）のも悪くないではないか。

つまり、この歌は恋人が自分に対し不誠実であることに対する、女性の恨み言を歌ったものであろうかと思われる。

なお、この歌の出典は古今和歌集巻代十九 雑体 に収められている次の和歌であると考えられる。

よみ人しらず
まめなれどなにぞはよけくかるかやのみだれてあれどあしけくもなし
（『新日本古典文学大系 古今和歌集』岩波書店による）

猿丸集の歌との相違点は、古今集の方には詞書がないこと、また本文の異同があることである。

8.おわりに

この書は、三蹟と称えられる藤原行成の書として、確証はないもののその書風を窺い知る上で重要な資料であるといえる。

【参考文献】
「新編国歌大観」編集委員会 編 『新編国歌大観』昭和 60 年～平成 4 年 角川書店
鈴木 宏子『和歌文学大系 18 猿丸集』平成 10 年 明治書院
久曾神 昇『西本願寺本三十六人集精成』昭和 41 年 風間書房
新井 栄蔵 小島 憲之 校注『新日本古典文学大系 5 古今和歌集』平成元年 岩波書店
中田 勇次郎 責任編集『書道芸術 第 15 巻 藤原 行成』平成 13 年 中央公論新社
国文学資料館 編『古筆への誘い』平成 17 年 三弥井書店
春名 好重 編『古筆大辞典』昭和 54 年 淡交社
久保田 淳 編『岩波日本古典文学辞典』平成 19 年 岩波書店
『重要美術品等認定物件目録』昭和 47 年 思文閣

故小鳥幸男氏寄贈コレクション目録

光ミュージアム学芸員 稲垣 幸祐

飛騨を代表する文化人の一人であり、高山市文化協会会長などを歴任された小鳥幸男氏が、令和 3（2021）年 7 月 2 日に 89 歳で永眠された。

ここに紹介するコレクションは、小鳥幸男氏より光ミュージアムに寄贈いただいた、松尾芭蕉など近世を中心とした俳諧関連の資料である。

小鳥幸男氏は、昭和 6（1931）年大垣市に生まれ、高山市の小鳥家の養子となられた。高山市職員となり、退職後は有限会社乗鞍ハイランド代表取締役社長、株式会社高山市民時報社代表取締役社長、同社会長、高山商工会議所副会頭、社団法人高山市文化協会会長を歴任される傍ら、俳誌「飛騨」の代表も務められ、俳諧に関する資料の収集にも精力的に取り組んでこられた。

そのコレクションを寄贈いただいたことを記念して、令和 2（2020）年に光ミュージアムにて『小鳥幸男コレクション 俳聖 芭蕉展 ～近世俳諧資料を中心として～』を開催した。

公私にわたり飛騨高山の文化芸術の振興に携わり、その発展に大きく寄与された小鳥氏のご功績ははかりしれない。

ここに改めて小鳥幸男氏のご功労に敬意を表し、心よりのご冥福をお祈り申し上げます。

目録

番号	資料名	作者名	制作年月日
1	「茶かすより」発句短冊	松永貞徳（延陀丸）	江戸前期
2	松永貞徳図画賛「門々の」	松村月溪（呉春）	江戸中～後期
3	「捨がたき」発句画賛	野々口立圃	江戸前期
4	「道の遍に」発句短冊	野々口立圃	江戸前期
5	「何鳥と」発句短冊	北村季吟	江戸前～中期
6	書状 佐々木半兵衛宛	北村季吟	江戸前～中期
7	「入室や」発句短冊	西山宗因（梅翁）	江戸前期
8	「八重桜」句歌切	西山宗因（梅翁）	江戸前期
9	「むしっては」発句短冊	小西来山	江戸前～中期
10	「行水の」発句短冊	上島鬼貫	江戸前～中期
11	「たはみては」発句自画賛 竹図	松尾芭蕉	江戸中期
12	「たはみては」発句自画賛 竹図	松尾芭蕉	江戸中期（元禄 7 年）
13	「ふらずとも」発句自画賛 竹図	松尾芭蕉	江戸中期（元禄元年）
14	「藻にすだく」発句短冊	松尾芭蕉	江戸前期（延宝 9 年）
15	「雪の河豚」発句小短冊	松尾芭蕉	江戸前期（天和 2 年）
16	「ぬす人に」発句短冊 芭蕉像	句・松尾芭蕉 / 画・作者不詳	江戸前期（貞享 5 年）
17	古今著聞集術道第九切	松尾芭蕉	江戸前～中期
18	芭蕉像	小川破笠（卯観子）	江戸中期（元文 2 年）
19	芭蕉像 「花にうき世」他四句併句	与謝蕪村	江戸中期（天明元年）
20	芭蕉像 「元日は」他四句併句	松村月溪（呉春）	江戸後期（寛政 5 年）
21	芭蕉像 「かれ枝に」の併句画賛	谷文晁	江戸後期（文化 10 年）
22	芭蕉像 「けふばかり」の句賛	桜井梅室	江戸後期

番号	資料名	作者名	制作年月日
23	芭蕉像「月花の」句文賛	芭蕉堂十一世露翠	大正時代
24	芭蕉像「観ずれば」発句画賛	白楽	
25	芭蕉翁陶像	横田軋治	江戸後期（天保 14 年）
26	芭蕉翁陶像	加藤勇	昭和 4 年
27	芭蕉翁陶像	藤木鶴山	昭和 6 年以前
28	芭蕉翁木像	角岡晟光	昭和 10 年
29	芭蕉翁木像	有村辰夫	平成元年
30	出雲崎の芭蕉翁木像	山口利男	平成 2 年
31	俳中五仙図	白川芝山	江戸後期
32	書状 紀文宛	宝井其角（晋子）	江戸前～中期
33	「木菟に」発句画賛	宝井其角（晋子）	江戸前～中期
34	不曲亭「あぜを越」発句短冊	宝井其角（晋子）	江戸前～中期
35	「嵯峨山や」発句短冊	宝井其角（晋子）	江戸前～中期
36	「明月や」の併句画賛	横井金谷	江戸後期
37	「秋のくれ」句文	服部嵐雪	江戸前～中期
38	「やすきせを」句文切	服部嵐雪	江戸中期（元禄 13 年頃）
39	「泥を見に」丈艸句縦幅	内藤丈艸	江戸前～中期
40	「盆の月」発句自画賛	森川許六（五老井）	江戸前～中期
41	「足もとを」発句短冊	向井去来	江戸前～中期
42	「空を行」発句短冊	向井去来	江戸前～中期
43	「風待や」発句短冊	杉山杉風	江戸前～中期
44	「一田づつ」発句自画賛	立花北枝（趙子）	江戸前～中期
45	「花とりに」句文懷紙	志太野坡	江戸前～中期
46	『ひさご』序文写し	与謝蕪村	江戸中期
47	笈の小文（須磨明石の巻）・芭蕉須磨遊行図	与謝蕪村	江戸中期（天明元年）
48	徒然草傘芒画	与謝蕪村	江戸中期
49	俳仙六哲図	与謝蕪村	江戸中期
50	蕪村翁頭巾画賛	与謝蕪村	江戸中期（安永 3 年）
51	蕪村自画賛「君行や」薄書	与謝蕪村	江戸中期
52	蕪村自画賛「花薄」「弁慶」	与謝蕪村	江戸中期
53	「稲の葉の」句短冊	松村月溪（呉春）	
54	書状 関更宛	加賀千代女	江戸中期
55	「初雪や」句賛幅	加賀千代女	江戸中期
56	「芦間から」句画賛	加賀千代女	江戸中期
57	うぐひすの浅茅かくれやけさの秋	加藤暁台	江戸中～後期
58	菊の句画賛半切	三浦樽良	江戸中～後期
59	天橋立「海すずし」句賛	釈蝶夢	江戸中～後期
60	「よしのやま」朱樹士郎句画賛幅	井上士郎	江戸中～後期
61	つくづくと見てをればちるさくらかな	井上士郎	江戸中～後期
62	「蓬萊や」句幅	小林一茶	江戸後期
63	文政二年八月三日句入日記	小林一茶	江戸後期
64	鶯邨（抱一）発句賛・鶯蒲画	酒井抱一	江戸後期
65	「余所へちる」句画幅	成田蒼虬	江戸後期
66	「午時過や」句幅	高桑関更	江戸中～後期
67	花本芹舎四季句幅	八木芹舎	江戸後期～明治
68	「もし夏を」句幅	八木芹舎	江戸後期～明治
69	「赤々と」句画賛	田川鳳朗	江戸後期

番号	資料名	作者名	制作年月日
70	「萬歳や」	大島蓼太（雪中庵）	江戸中～後期
71	「よしの山」	大島蓼太（雪中庵）	江戸中～後期
72	「六月や」 句幅	大島対山	江戸後期
73	「浮草や」 句画賛	中川乙由（麦林）	江戸前～中期
74	「枯野原」 句短冊	直山大夢（南無庵）	
75	「つるなどは」 句幅	松窓乙二	江戸中～後期
76	「花も葵と」 発句画賛	横井也有（半掃庵）	江戸中期
77	「世をいとふ」 狂歌画賛	横井也有（半掃庵）	江戸中期
78	「たなばたや」	成田蒼虬	江戸中～後期
79	「里は人の」 発句画賛	荒木万籟・東山義亮	
80	柿丸主人四季の句幅	桜井梅室	江戸後期
81	「乙鳥や」 句賛つばくらめ、「夏の夜や」 句賛	小林一茶・松永貞徳（延陀丸）	
82	「是ぞこれ」 句幅	西山宗因（梅翁）	江戸前期
83	日に這す	松木淡々（半時庵）	江戸中期
84	つるべ画賛	松木淡々（半時庵）	江戸中期
85	「湖の」 発句切	向井去来	江戸前～中期
86	「竹簀戸の」 発句短冊入画賛	句・内藤丈艸 / 画・作者不詳	江戸時代前～中期
87	柴ふねの句画賛	綿屋希因	江戸中期
88	芭蕉像発句画賛	吉原酔雨	江戸後期～明治
89	「曙の」 発句短冊	大島完来	江戸後期
90	「ちさきほど」 発句幅	成田蒼虬	
91	柳ある	桜井梅室	江戸後期
92	麦林うぐひすの句	中川乙由（麦林）	
93	「しら菊に」 発句短冊	杉山杉風	江戸前～中期
94	大黒乗牛自画賛	野々口立圃	江戸前期
95	恵比寿大黒画賛	野々口立圃	江戸前期
96	俳諧七部集一「冬の日」	山本荷兮	江戸前期（貞享元年）
97	俳諧七部集一「春の日」	山本荷兮	江戸前期（貞享3年）
98	俳諧七部集二「炭俵」	志太野坡・小泉孤屋・池田利牛	江戸前期（元禄7年）
99	俳諧七部集三「猿みの」	向井去来・野沢凡兆	江戸前期（元禄4年）
100	俳諧七部集四「続猿蓑」	服部沾圃・各務支考	江戸中期（元禄11年）
101	俳諧七部集五「阿羅野」 曠野集巻之一より巻之五迄	山本荷兮	江戸中期（元禄2年）
102	俳諧七部集六「阿羅野」 曠野集巻之六並巻之七	山本荷兮	江戸中期（元禄2年）
103	俳諧七部集七「阿羅野附員外」	山本荷兮	江戸中期（元禄2年）
104	俳諧之秘記	松尾芭蕉	江戸前～中期
105	俳諧百一集	尾崎康工	江戸中期
106	俳諧三拾六歌僊	与謝蕪村	江戸中期
107	芭蕉翁附合集評註一巻	大島蓼太・石兮	江戸中期
108	芭蕉翁附合集評註二巻	大島蓼太・石兮	江戸中期
109	芭蕉翁附合集評註下巻	大島蓼太・石兮	江戸中期
110	俳諧古雅談	己蝶	江戸中期（宝暦7年）
111	たびねろん	向井去来	江戸前～中期